

イオアンに因る聖福音

第二章 一 太初に言有り、言は神と共に在り、言は即神なり。二 是の言は太初に神と共に在り。三 萬物は彼に由りて造られたり、凡そ造られたる者には、一も彼に由らずして造られしは無し。四 彼の中に生命有り、生命は人の光なり。五 光は暗に照り、暗は之を蔽はざりき。六 神より遣されし人あり、其名はイオアンなり。七 彼は證の爲に來れり、光の事を證し、衆人をして彼に因りて信ぜしめん爲なり。八 彼は光に非ず、乃 光の事を證せん爲に遣されたり。九 眞の光あり、凡そ世に來る人を照す者なり。一〇 彼嘗て世に在り、世は彼に由りて造られたり。而して世は彼を知らざりき。一一 己に屬する者に來れり、而して己に屬する者は彼を受けざりき。一二 彼を受け、其名を信する者には 彼神の子となる權を賜へり。一三 是れ血氣に由るに非ず、情欲に由るに非ず、人欲に由るに非ず、乃 神に由りて生れし者なり。一四 言は肉體と成りて、我等の中に居りたり、恩寵と眞實とに満てられたり。我等彼の光榮を見たり、父の獨生子の如き光榮なり。一五 イオアン彼の事を證し、呼びて曰へり、我が嘗て、我の後に來る者は、我の前と爲れり、

蓋 其本我より先なる者なりと言ひしは、即斯の人なり。一六 彼の充滿より我等皆恩寵の上に恩寵を受けたり。一七 蓋律法はモイセイに由りて授けられ、恩寵と眞實とはイイススハリストスに由りて來れり。一八 神を見し人未だ嘗て非ず、唯獨生の子、父の懷に在る者は、彼を彰せり。一九 イオアンの證は左の如し、イウデア人イエルサリムより司祭及び「レワイト」等を遣して、彼に爾は誰たると問ひし時、二〇 彼承けて諱まざりき、承けて曰く、我はハリストスに非ず。二一 又彼に問へり、然らば何ぞ、爾はイリヤなるか。曰く、非ず。預言者なるか。答へて曰へり、否。二二 彼等之に謂へり、爾は誰ぞ、我等を遣し、者に答を爲さしめよ、爾は己の事を如何に云ふか。二三 彼曰へり、我は野に呼ぶ者の聲、主の道を直くせよと云ふ者なり、預言者イサイヤの言ひしが如し。二四 遣されし者はファリセイ等に屬せり。二五 彼等又之に問ひて曰へり、爾ハリストスに非ず、イリヤに非ず、預言者に非ざれば、何ぞ洗を授くる。二六 イオアン彼等に答へて曰へり、我は水を以て洗を授く、然れども爾等の中に立てる者あり、爾等の識らざる者なり。二七 彼は 則 我の後に來りて、我の前と爲れる者なり。我は其屢の帶を解くにも堪へず。二八 此の事はイオルダンの外なるワイファアラ、即 イオアンの洗を授くる處に行はれたり。

二九 明日イオアンはイイススの己に來るを見て曰く、視よ、神の羔、世の罪を任ふ者なり。三〇 我が嘗て、我の後に來る者ありて、我の前と爲れり、蓋其本我より先なる者なりと云ひしは、即斯の人なり。三一 我は彼を識らざりき、然れども來りて、水を以て洗を授くるは、殊に彼がイズライリに顯されん爲なり。三二 イオアン又證して曰へり、我は聖神、鴿の如く天より降りて、彼に止るを見たり。三三 我は彼を識らざりき、然れども水を以て洗を授けん爲に我を遣し、者は我に謂へり、爾が聖神の降りて、之に止るを見る者、此れ即聖神を以て洗を授くる者なりと。三四 我之を見、而して其神の子たるを證せり。三五 明日イオアン又立てり、其門徒の二人偕にせり。三六 イイススの行くを見て曰く、視よ、神の羔なり。三七 二門徒其言を聞きて、イイススに從へり。三八 イイスス顧みて、彼等の其後に從ふを見て、之に謂ふ、爾等何を求むるか。彼等曰へり、ラウワイ、(譯すれば夫子)、爾何にか居る。三九 曰く、來りて見よ。彼等來りて、其居る所を觀、是の日彼と偕に居たり。四〇 イオアンに聽きて、イイススに從ひし二人の中一はアンドレイ即シモンペトルの兄弟なり。四一 彼先づ其兄弟シモンに遇ひて、之に謂ふ、我等メツシヤ、(譯すればハリストス、)に遇へり。四二 乃彼をイ

イススに攜へたり。イイスス彼に目を注ぎて曰へり、爾はイオナの子シモンなり、爾はキファ、(譯すればペトル、)と稱へられん。四三 明日イイススガリラヤに往かんと欲し、フィリッパに遇ひて、之に謂ふ、我に從へ。四四 フィリッパはワイフサイダの人にして、アンドレイ及びペトルと邑を同じくせり。四五 フィリッパはナファナイルに遇ひて、之に謂ふ、我等は、モイセイが其律法に、及び諸預言者が記し、所の者に遇へり、是れイオシフの子、ナザレトの人、イイススなり。四六 ナファナイル之に謂へり、豈ナザレトより善き者の出づるあらんや。フィリッパ曰く、來りて觀よ。四七 イイススはナファナイルの己に來たるを觀て、彼を指して曰く、視よ、誠にイズライリ人にして、詭譎なき者なり。四八 ナファナイル彼に謂ふ、爾何に由りて我を知れるか。イイスス答へて曰へり、フィリッパが未だ爾を呼ばざる先、爾が無花果樹の下に在る時、我爾を見たり。四九 ナファナイル答へて彼に謂ふ、夫子、爾は神の子、爾はイズライリの王なり。五〇 イイスス答へて曰へり、我が爾を無花果樹の下に見たりと言ひしに因りて、爾信ず、爾此よりも大なる事を見ん。五一 又彼に謂ふ、我誠に誠に爾等に語ぐ、是より爾等は天開けて、神の使等が人の子の上に陟降するを見ん。

第二章 一 第三日にガリレヤのカナに婚筵あり、イイススの母も彼處に在りき、ニイイスス及び其門徒も又婚筵に招かれたり。三酒の乏しきに因りて、イイススの母之に謂ふ、彼等に酒なし。四イイスス曰く、婦よ、我と爾と何ぞ與らん、我の時未だ至らず。五其母諸僕に謂ふ、彼が爾等に命ずる所を行へ。六彼處にイウデヤ人の潔の例に従ひて、石の水甕六あり。各二三斗を容る。七イイスス諸僕に謂ふ、甕に水を満たせ。之に満たして、幾ど溢る。八又彼等に謂ふ、今掘みて、司筵者に遞れ。乃遞れり。九司筵者は酒に變じたる水を嘗めて、(其奚れよるするを知らざりき、唯水を掘みし諸僕之を知れり、)新娶者呼びて、一〇彼に謂ふ、凡の人は先づ旨酒を進め、酣なるに及びて、魯酒を進む、爾は旨酒を留めて今に至れり。一一是くの如くイイススガリレヤのカナに於て休徴の始を立て、其光榮を顯せり、其門徒彼を信ぜり。一二厥後彼親ら、及び其母、其兄弟、其門徒はカペルナウムに下りて、彼處に居りし日多からず。一三イウデヤ人の逾越節近づきて、イイススイエルサリムに上れり。一四殿に於て牛羊鴿を市り、及び兌換する者の坐せるを見れば、一五繩を以て鞭を爲りて、其衆及び羊牛を殿より逐ひ出だし、兌換する者の金を散らし、其案を倒し、

一六鴿を市る者に謂へり、此の物を此より取れ、我が父の家を貿易の家と爲す勿れ。一七是に於て彼の門徒は、録して、爾の家に於ける熱心は我を蝕むと、云へるを憶ひ起せり。一八イウデヤ人彼に謂へり、爾等に此等の事を行ふ權あるを、何の休徴を以て我等に示さんか。一九イイスス彼等に答へて曰へり、爾等此の殿を毀て、我三日にして之を興さん。二〇イウデヤ人曰へり、此の殿を建つるには四十六年を経たるに、爾三日にして、之を興さんか。二一然れども彼は其肉體の殿を指して云ひしなり。二三彼が死より復活せし後、其門徒は、彼が曾て之を言ひしことを憶ひ起して、聖書とイイススの言ひし言とを信ぜり。二三彼が逾越節筵にイエルサリムに在りし時、多くの者彼が行ひし休徴を見て、其名を信ぜり。二四然れどもイイスス自ら己を彼等に託せざりき、蓋衆人を知れり、二五又他人が人を證するを要せざりき、自ら人の中藏を知りたればなり。

第三章 一 ファリセイ等の中に名はニコデイムと云ふ人あり、イウデヤ人の宰の一なり。二此の人夜イイススに來りて、彼に謂へり、夫子、我等は爾が神より來りし師なるを知る、蓋爾が行ふ所の休徴は、若し神之と偕にせずば、人行ふ能はず。三イイスス彼に答へて曰へり、我誠に誠

に爾に語り、人若し上より生れずば、神の國を見るを得ず。
四ニコデイル彼に謂ふ、人既に老ゆれば、如何ぞ生るゝを得ん、豈再其母の腹に入りて、生るゝを得んや。五イイス答へて曰へり、我誠に誠に爾に語り、人若し水及び神より生れずば、神の國に入るを得ず。六肉より生れし者は肉なり、神より生れし者は神なり。七我が爾に爾等上より生るべしと云ひしを奇しむ勿れ。八風は欲する所に吹く、爾其聲を聞けども、其何より來り、何へ往くを知らず、凡そ神より生れし者は是くの如し。九ニコデイル彼に答へて曰へり、焉ぞ斯の事あるを得ん。一〇イイス答へて曰へり、爾はイズライリの師たるに、猶斯の事を知らざるか。一一我誠に誠に爾に語り、我等は知る所を言ひ、見し所を證す、而して爾等は我等の證を受けず。一二我地の事を言ひしに、爾等信ぜざれば、若し天の事を云はゞ、爾等安ぞ信ぜん。一三天より降りし人の子、仍天に在る者の外に、天に升りし者なし。一四モイセイが野に在りて蛇を擧げし如く、人の子も是くの如く擧げらるべし、一五凡そ彼を信する者の亡ぶるなく、乃永遠の生命を得ん爲なり。一六蓋神は世を愛して、其獨生の子を賜ふに至れり、凡そ彼を信する者の亡ぶるなく、乃永遠の生命を得ん爲なり。一七蓋神が其子を世に遣し、は、世を定罪せん爲に非ず、乃世の彼

に由りて救はれん爲なり。一八彼を信する者は定罪せられず、信ぜざる者は已に定罪せられたり、神の獨生の子の名を信ぜざりし故なり。一九定罪とは左の如し、光世に來りしに、人人光よりも多く、暗を愛せり、彼等の行の惡かりし故なり。二〇蓋凡そ不善を作す者は光を惡みて、光に就かず、彼の行の責められざらん爲なり、其惡しき故なり。二一然れども眞實を行ふ者は光に就く、彼の行の顯れん爲なり、神に在りて行はれし故なり。二三斯の後イイスス其門徒と與にイウデヤの地に來り、彼等と偕に彼處に居りて、洗を授けたり。二四イオアンも又サリムに近きエノンに在りて、洗を授けたり、彼處には水多き故なり、人人來りて洗を受けたり。二五蓋イオアン未だ獄に下されざりき。二六時にイオアンの門徒はイウデヤ人の潔の事に就きて論を起せり。二六イオアンに來りて、之に謂へり、夫子、爾と偕にイオルダンの外に在りて、爾が證せし所の者、視よ、彼は洗を授け、人皆彼に往く。二七イオアン答へて曰へり、天より授けられしに非ざれば、人一人も受くる能はず。二八我が嘗て、我はハリストスに非ず、乃其前に遣されし者なりと言ひしことは、爾等自ら我が爲に證す。二九新婦ある者は新娶者なり、新娶者の友、立ちて彼に聽く者は、新娶者の聲の甚喜ぶ。今我が此の喜は滿てられたり。三〇彼は長

ずべく、我は消すべし。三 上より来る者は萬有の上に在り、地よりする者は地に屬し、其言ふ所も亦地に屬す、天より来る者は萬有の上に在り。三二 彼は其見し所、聞きし所を證す、而して彼の證を受くる者なし。三三 其證を受けし者は神の眞なるを印證せり。三四 蓋神の遣し、者は神の言を言ふ、神が神を與ふるには限量を以てせざればなり。三五 父は子を愛し、而して萬物を其手に授けたり。三六 子を信する者は永遠の生命を有ち、子を信ぜざる者は生命を見ざらん、乃神の怒は其上に止まる。

第四章

一 イイススは、其門徒を得、及び洗を授くることイオアンより多きを、フアリセイ人が聞きたりと、知りし時、二 然れどもイイスス親ら洗を授けしに非ず、其門徒此を爲せり、三 乃イウデヤを離れて、復ガリレヤに往けり。四 彼サマリヤを過ぐるべきに由りて、五 サマリヤの邑シハリと名づくる處に來れり、イアコフが其子イオシフに與へたる地に近し。六 彼處にイアコフの井あり。イイスス旅に疲れて、井の傍に坐せり。時約六時なり。七 サマリヤの婦、水を汲む爲に來れり。イイスス之に謂ふ、我に飲ましめよ。八 蓋其門徒は食を市はん爲に邑に往けり。九 サマリヤの婦彼に謂ふ、爾はイウデヤ人たるに、如何にして我サマリヤの婦

に飲むを求むるか。蓋イウデヤ人とサマリヤ人とは相交際せざるなり。一〇 イイスス之に答へて曰へり、若し爾は、神の賜、及び我に飲ましめよと、爾に言ふ者の誰たるかを知らば、爾自ら彼に求めん、而して彼は爾に活ける水を與へん。一一 婦彼に謂ふ、主世爾に汲む器なく、井も亦深し、然らば何より爾に活ける水あるか。一二 爾豈我が祖イアコフより大なるか、彼は我等に此の井を與へ、己も、其諸子も、其家畜も、之より飲みたり。一三 イイスス答へて謂へり、凡そ此の水を飲む者は、復渴かん、一四 然れども我が與へんとする水を飲む者は、世世に渴かざらん、乃我が彼に與へんとする水は、其中に於て永遠の生命に湧く水の泉と爲らん。一五 婦彼に謂ふ、主よ、我に此の水を與へよ、我が渴かず、亦此に來りて汲まざらん爲なり。一六 イイスス之に謂ふ、往きて、爾の夫を呼びて、此に來れ。一七 婦對へて曰へり、我に夫なし。イイスス之に謂ふ、爾が夫なしと言ひしは是なり、一八 蓋爾に五人の夫ありき、而して今ある者は爾の夫に非ず、此れ爾眞を言へり。一九 婦彼に謂ふ、主よ、我觀るに爾は預言者なり。二〇 我が先祖は此の山に拜せり、然るに爾等は拜すべき處はイエルサリムに在りと言ふ。二一 イイスス之に謂ふ、婦よ、我を信ぜよ、此の山にも非ず、イエルサリムにも非ずして父を拜せん

時は来る。二三 爾等は拜する所を知らず、我等は拜する所を知る、蓋救はイウデヤ人よりするなり。二三 然れども時は来る、今は是なり、眞の禮拜者は神を以て眞を以て拜せん、蓋父は是くの如く彼を拜する者を覓む。二四 神は神なり、彼を拜する者は神を以て眞を以て拜すべし。二五 婦彼に謂ふ、我知る、メツシヤ、即 ハリストスは來らん、彼來るとき、悉く我に告げん。二六 イイスス之に謂ふ、是れ我、爾と語る者なり。二七 適 其門徒來りて、彼が婦と語れるを異みたれども、一も、爾は何を求むるか、或は之と何を語るかと、云ひし者なし。二八 時に婦其水甕を遺して、邑に往きて、人人に謂ふ、二九 來りて、我が凡そ行ひし事を我に告げし人を觀よ、是れハリストスに非ずや。三〇 人人邑を出でて、彼に往けり。三一 此の際門徒彼に請ひて曰へり、夫子、食へ。三二 然れども彼は之に謂へり、我に食ふべき糧あり、爾等が知らざる者なり。三三 故に門徒互に言へり、豈孰か彼に食を饋りたる。三四 イイスス彼等に謂ふ、我が糧は我を遣し、者の旨を行ひ、其功を成就するに在り。三五 爾等は尚四月にして收穫は來らんと云ふに非ずや、我爾等に語ぐ、爾等目を擧げて、田を觀よ、已に白くして穫るべし。三六 穫る者は値を得て、實を永遠の生命に積む、播く者も穫る者も共に喜ばん爲なり。三七 蓋彼は播き此は穫

ると云へるは、斯に於て眞なり。三八 我爾等を遣して、爾等が勞せざりし所を獲らしむ、他人は勞し、爾等は其勞に入れり。三九 彼の邑の多くのサマリヤ人は婦が、彼は我が凡そ行ひし事を我に告げたりと、證せし言に因りて彼を信ぜり。四〇 故にサマリヤ人は彼に就きし時、偕に留らんことを請へり、彼は彼處に留りしこと二日なり。四一 尚多くの者は彼の言に因りて信ぜり。四二 而して婦に謂へり、我等は已に爾の言に因りて信ずるに非ず、蓋自ら聞きて、彼は誠に世の救主ハリストスなりと知り。四三 二日を越えて、彼彼處を出で、ガリレヤに往けり。四四 蓋イイスス親ら、預言者は其故土に於て尊ばれずと證せり。四五 ガリレヤに來りし時、ガリレヤ人彼を接けたり、凡そ彼がイエリサリムに節筵の時に行ひし事を見ればなり、蓋彼等も亦節筵に往けり。四六 是に於てイイスス復ガリレヤのカナに來れり、嘗て水を酒に變ぜし所なり。適 一の王臣あり、其子カペルナウムに在りて病めり。四七 彼はイイススのイウデヤよりガリレヤに來りしを聞きて、之に就き、下りて其子を醫さんことを請へり、蓋子は死に瀕めり。四八 イイスス之に謂へり、爾等若し休徴と奇蹟とを見ずば、信ぜざらん。四九 王臣彼に謂ふ、主よ、請ふ、我が子の死せざる先に下れ。五〇 イイスス之に謂ふ、往け、爾の子は生く。人

はイイススの之に言ひし言を信じて往けり。五一 往く時、其諸僕彼に遇ひて、告げて曰へり、爾の子は生く。五二 彼は之に、其何の時に愈え始めしを問ひたれば、彼に謂へり、昨日第七時に熱退けり。五三 父は、此れ即イイススが彼に爾の子は生くと言ひし時なるを知れり。是に於て彼自ら及び其全家皆信じたり。五四 此れ第二の休徴なり、イイススイウデヤよりガリレヤに來りて、之を行へり。

第五章 一 厥後イウデヤ人の節筵ありて、イイススイエル

サリムに上れり。ニエルサリムに羊の門の側に池あり、エウレイの言にワイフエズダと曰ふ。三之に傍ひて五の廊あり、此の中に多くの病者、瞽者、跛者、血枯る者臥して、水の動くを待てり。四 蓋主の使時ありて池に下りて、水を動かせり、水の動く後先づ池に入る者は、何の病を患ふるに論なく、愈ゆるを得たり。五 彼處に一人三十八年病を患ふる者ありき。六 イイスス彼が臥せるを見、其之を患ふることを已に久しきを知りて、彼に謂ふ、爾愈えんことを欲するか。七 病者答へて曰へり、主よ、然り、但水の動く時、我を扶けて、池に下す人なし、我が來る時は、他人我先だちて下る。八 イイスス彼に謂ふ、起きて、爾の牀を取りて行け。九 其人直に愈え、其牀を取りて行けり、是の日は安息日な

り。一〇 故にイウデヤ人愈されし者に謂へり、安息日なり、爾牀を取るは宜しからず。二 彼答へて曰へり、我を愈し者、我に爾の牀を取りて行けと言へり。一二 彼等問へり、爾に、牀を取りて行けと言ひし人は誰ぞ。一三 愈されし者は其誰たるを知らざりき、蓋彼處には人の衆きに因りて、イイスス隠れたり。一四 厥後イイスス此の人に殿に遇ひて、之に謂へり、視よ、爾は愈えたり、復罪を犯す勿れ、恐らくは患に遭ふこと更に甚しからん。一五 彼往きて、イウデヤ人に、我を愈し者、イイススなりと告げたり。一六 是に於てイウデヤ人イイススを窘逐して、殺さんことを謀れり、彼が安息日に此くの如き事を行ひし故なり。一七 イイスス彼等に謂へり、我が父は今に至るまで爲し、我も亦爲す。一八 此れに縁りてイウデヤ人愈彼を殺さんことを謀れり、其第安息日を犯し、のみならず、乃又神を己の父と言ひて、己を神と齊しく爲し、故なり。一九 イイスス彼等に答へて曰へり、我誠に誠に爾等に語ぐ、子は若し父の行ふ所を見ずば、己に由りて何事をも行ふ能はず、父の行ふ所は、子も亦同じく之を行ふ。二〇 蓋父は子を愛して、凡そ己の行ふ所を彼に示す、且此より大なる事を彼に示さん、爾等の奇まん爲なり。二二 蓋父が死せし者を起して、之を生かすが如く、子も亦欲する所の者を生かす。二二

蓋父は何人をも審判せず、乃 悉くの審判を子に委ねたり、二三 衆皆子を敬ふこと、父を敬ふが如くせん爲なり。子を敬はざる者は、彼を遣し、父を敬はず。二四 我誠に誠に爾等に語り、我が言を聴きて、我を遣し、者を信ずる人は、永遠の生命を有ち、且審判の爲に來らず、乃 死より生命に移れり。二五 我誠に誠に爾等に語り、時は來る、今は是れなり、死せし者は神の子の聲を聞かん、之を聞き生きん。二六 蓋父が己の内に生命を有つが如く、此くの如く子にも己の内に生命を有たしめ、二七 且彼に審判を行ふ權を與へたり、其人の子たるに因りてなり。二八 之を奇む勿れ、蓋時は來る、凡そ墓の中に在る者は神の子の聲を聞かん、二元 而して善を行ひし者は生命の復活に出で、惡を爲し、者は定罪の復活に出でん。三〇 我何事をも己に由りて行ふ能はず、聞く所に遵ひて審判す、而して我が審判は義なり、蓋我己の旨を求めず、乃 我を遣し、父の旨を求むるなり。三一 若し我自ら己の事を證せば、我が證は眞ならず。三二 別に我の事を證する者あり、我其我を證する證の眞なるを知る。三三 爾等嘗て人をイオアンに遣し、に、彼は眞實の爲に證を作せり。三四 然れども我は人より證を受けず、乃 此を言ふは爾等の救はれん爲なり。三五 彼は燃え且光る燈たりき、爾等は其光に在りて暫く喜

ばんと欲せり。三六 然るに我にはイオアンの證より大なる者あり、蓋父が我に與へて成さしむる事、此の我が行ふ所の事は、我の爲に、父が我を遣し、事を證す。三七 且我を遣し、父自ら我の爲に證を作せり。惟爾等未だ嘗て其聲を聞かず、其形を見ざりき。三八 且其言を爾等の衷に存せず、蓋彼の遣し、者は、爾等之を信ぜざるなり。三九 聖書を探れ、蓋爾等は此に由りて永遠の生命を得んと意ふ、此れ我の事を證するなり。四〇 然れども爾等は生命を得ん爲に我に就くを欲せず。四一 我榮を人より受けず。四二 惟我爾等を知る、爾等の衷には神に於ける愛なし。四三 我は我が父の名に因りて來りしに、爾等我を接けず、若し他人己の名に因りて來らば、爾等之を接けん。四四 爾等互に榮を相受け、獨一の神よりする榮を求めずして、豈信ずるを得んや。四五 我爾等を父の前に訴へんと意ふ勿れ、爾等を訴ふる者にモイセイあり、爾等が恃む所の者なり。四六 蓋爾等若しモイセイを信ぜば、我をも信ぜん、彼は我の事を書したればなり。四七 若し爾等彼の書を信ぜずば、焉ぞ我の言を信ぜん。

第六章 一 厥後イイススガリレヤの海、即 ティワエリアダの海の彼の岸に濟りしに、二 衆くの民彼に隨へり、彼が

病者に行ひし奇蹟を見ればなり。三 イイスス山に登りて、彼處に門徒と偕に坐せり。四 時にイウデヤ人の節筵なる逾越節近づけり。五 イイスス目を擧げて、衆くの民の彼に來るを見て、フィリップに謂ふ、我等何處より餅を市ひて、彼等に食はしめんか。六 之に言ひしは、彼を試みん爲なり、蓋自ら何を行はんとするを知れり。七 フィリップ答へて曰へり、銀三百を以て餅を市ふとも、彼等の爲に各少しづゝを受くるに足らず。八 其門徒の一、シモンペトルの兄弟アンドレイ、彼に謂ふ、九 此に一の童子ありて、麩麥の餅五と小き魚二とを有てり、然れども是れ何をか此の多數に爲さん。一〇 イイスス曰へり、人人を坐せしめよ。其處に多くの草あり。是に於て人人席坐せり、數約五千なり。二 イイスス餅を取り、感謝して、門徒に分ち與へ、門徒は席坐する者に與へたり、魚も亦然り、乃欲する所に從へり。三 衆既に飽きて、彼門徒に謂ふ、餘りたる屑を聚めて、廢る所母らしめよ。四 乃聚めて、食ひし者の餘したる五の麩麥の餅の屑を十二の筐に盈てたり。五 人人イイススの行ひし奇蹟を見て曰へり、是れ誠に世に來るべき預言者なり。六 イイススは彼等が來り、急に彼を執りて、王と爲さんと欲するを知りて、復獨山に遁れたり。七 日の暮るゝ時、其門徒下りて海に至り、一七 舟に登りて、海

の彼の岸なるカペルナウムに往けり。既に昏くなりて、イイスス彼等に來らず。一八 風大に吹きて、海は浪たてり。一九 漕ぎ行くこと約二十五或は三十小里にして、彼等はイイススの海を履みて、舟に近づくを見て、懼れたり。二〇 彼は之に謂ふ、是れ我なり、懼るゝ勿れ。二一 門徒彼を舟に受けんと欲せり、舟は直に往く所の地に着きたり。二二 明日、海の彼の岸に立てる民は、彼處に門徒の登りたる舟の外に他の舟なく、且イイススは門徒と偕に舟に登らずして、門徒のみ往きしを見たり。二三 時に他の舟はティワエリアダより主の感謝して後餅を食ひし所の近く來れり。二四 是に於て民はイイススの此に在らず、其門徒も在らざるを見て、己も亦舟に登り、イイススを尋ねてカペルナウムに來れり。二五 海の彼の岸に於て彼に遇ひて曰へり、夫子、爾は何の時に此に來れる。二六 イイスス彼等に答へて曰へり、我誠に誠に爾等語ぐ、爾等の我を尋ぬるは、奇蹟を見し故に非ず、乃餅を食ひて飽きたる故なり。二七 朽つる糧の爲に勞する勿れ、乃永遠の生命に存する糧、人の子が爾等に與へんとする者の爲に勞せよ、蓋父なる神は彼を印證せり。二八 彼等曰へり、我等何を行ひて、神の事を爲さんか。二九 イイスス答へて曰へり、神の事とは、爾等が彼の遣しゝ者を信ずること、是なり。三〇 彼等曰へり、爾何の休徴を行

ひて、我等をして之を見て、爾を信ぜしめんか、爾何を爲すか。三一我等の先祖は野に在りて「マンナ」を食へり、録されしが如し、天より彼等に餅を與へて食はしめたりと。三二 イイスス彼等に謂へり、我誠に爾等に語ぐ、モイセイが爾に餅を天より與へしに非ず、乃我が父は爾等に眞の餅を天より與ふ。三三 蓋神の餅は天より降りて、世に生命を與ふる者なり。三四 彼等曰へり、主よ、恒に我等に斯の餅を與へよ。三五 イイスス彼等に謂へり、我は生命の餅なり、我に來る者は飢えず、我を信する者は永く渴かざらん。三六 然れども我爾等に嘗て、爾等我を見たれども信ぜずと言へり。三七 凡そ父の我に與ふる者は、我に來らん、我に來る者は、我之を外に逐はざらん。三八 蓋我が天より降りしは、己の旨を行はん爲に非ず、乃我を遣し、父の旨を行はん爲なり。三九 我は遣し、父の旨は、即彼が我に與へし者の中、我其一をも亡はずして、末の日に於て悉く之を復活せしめんとするに在り。四〇 我を遣し、者の旨はすなはち復活せしめんとするに在り。四一 我を遣し、者の旨は即凡そ子を見て之を信する者は、永遠の生命を有ち、我末の日に於て彼を復活せしめんとするに在り。四二 時にイウデヤ人、其我は天より降りし餅なりと言ひしに因りて、彼を怨みて四二云へり、此れイオシフの子イイスス、我等が其父と母とを識れる者に非ずや、如何にして彼は我天より降り

と言ふか。四三 イイスス彼等に答へて曰へり、爾等相共に怨言する勿れ。四四 我を遣し、父之を引かざれば、人我に來る能はず、我に來る者は我末の日に於て之を復活せしめん。四五 諸預言者に録せるあり、彼等皆神に教へられんと、凡そ父に聽きて學びし者は我に來る。四六 此れ人曾て父を見たると曰ふに非ず、惟神よりする者は彼父を見たるなり。四七 我誠に誠に爾等に語ぐ、我を信する者は永遠の生命を有つ。四八 我は生命の餅なり。四九 爾等の先祖は野に在りて「マンナ」を食ひたれども、死せり。五〇 夫れ天より降る餅は、乃之を食ふ者死せざるを致さん。五一 我は天より降りし生ける餅なり、此の餅を食ふ者は世世に生きん。我が與へんとする餅は、即私の體なり、我が世の生命の爲に與へんとする者なり。五二 時にイウデヤ人互に論じて曰へり、彼如何ぞ我等に其體を與へて、食はしむるを得ん。五三 イイスス彼等に謂へり、我誠に誠に爾等に語ぐ、爾等若し人の子の體を食はず、其血を飲まずば、己の衷に生命を有たざらん。五四 我が體を食ひ、我が血を飲む者は、永遠の生命を有つ、我末の日に於て彼を復活せしめん。五五 蓋我が體は眞に糧なり、我が血は眞に飲物なり。五六 我が體を食ひ、我が血を飲む者は、我に居り、我も彼に居るなり。五七 生くる父我を遣し、彼父に由りて生くるが如く、我を食ふ者も我

に由りて生きん。五八 斯れは乃天より降りし餅なり。爾等の先祖が「マンナ」を食ひて、死せし如きに非ず、此の餅を食ふ者は世世に生きん。五九 此等の事は、彼カペルナウムに教ふる時、會堂に於て言へり。六〇 其門徒の中多くの者之を聞きて曰へり、難い哉斯の言、誰か之を聽くを得ん。六一 イイス己の衷に其門徒が怨言するを知りて、彼等に謂へり、此れ爾を惑はすか。六二 爾等若し人の子が曩に在りし所に升るを見ば如何。六三 神は生かす者なり、肉は益なし。我が爾等に語りし言は神なり、生命なり。六四 然れども爾等の中に信ぜざる者あり。蓋イイスは初より信ぜざる者の誰たる、及び彼を賣らんとする者の誰たるを知れり。六五 又曰へり、故に我曾て爾等に我が父より之に與へらるゝに非ざれば、人我に來る能はずと言へり。六六 是より其門徒多く返りて、復彼と偕に往かざりき。六七 イイス十二徒は謂へり、爾等も去らんと欲するか。六八 シモンペトル彼に答へて曰へり、主よ、我等誰にか往かん、爾は永遠の生命の言を有つ。六九 我等は爾がハリストス、活ける神の子たるを信じ、且知れり。七〇 イイス彼等に答へて曰へり、我爾等十二を選びしに非ずや、而して爾等の中一人は悪魔なり。七一 是れ彼はシモンの子イウダ「イスカリオト」を指して言へり、蓋此の人は十二の一にして、彼を賣らん

とする者なり。

第七章 一 厥後イイスガリレヤを巡れり、蓋イウデヤを巡らんことを欲せざりき、イウデヤ人彼を殺さんと謀りたればなり。二 イウデヤ人の節筵なる張幕節近づけり。三 イイスの兄弟彼に謂へり、此を去りてイウデヤに往け、爾の門徒も爾が行ふ所の事を見ん爲なり。四 蓋人自ら顯れんと欲して、隱に事を行ふ者ならず。若し爾此等の事を行はゞ、己を世に顯せ。五 蓋其兄弟も亦彼を信ぜざりき。六 イイス彼等に謂ふ、我の時未だ至らず、爾等の時は恒に備れり。七 世は爾等を惡む能はず、然れども我を惡む、我其行ふ所の惡しきを證すればなり。八 爾等は此の節筵に上れ、我は未だ此の節筵に上らず、蓋我の時未だ盈たざるなり。九 之を彼等に言ひて、ガリレヤに留まれり。一〇 然れども其兄弟の節筵に上りし後、彼も亦上れり、昭然ならずして、乃隱然なるが如し。二 節筵の時、イウデヤ人彼を尋ねて曰へり、彼は安に在るか。三 民の中に彼の事に於て多くの論ありき、或は善なりと曰ひ、或は否、乃民を惑はすと曰へり。一三 然れどもイウデヤ人を懼るゝに由りて、顯に彼の事を言ふ者なかりき。一四 節筵己に半にして、イイス殿に上りて教へたり。一五 イウデヤ人奇と

して曰へり、此の人學ばざるに、如何にして書を識れるか。
一六 イイスス彼等に答へて曰へり、我が教は我に屬するに
非ず、乃我を遣し、者に屬するなり。一七 人若し彼の旨
を行はんと欲せば、斯の教の神よりするか、或は我が己
に由りて言ふかを知らん。一八 己に由りて言ふ者は己の榮
を求む、之を遣し、者の榮を求むる者は、斯れ眞なる者に
して、其衷に不義なし。一九 モイセイ豈律法を爾等に與へ
しに非ずや、而して爾等の中に律法を守る者なし。爾等
胡爲れぞ我を殺さんと謀る。二〇 民答へて曰へり、爾魔鬼
に憑らる、誰か爾を殺さんと謀る。二一 イイスス答へて彼等
に謂へり、我一の業を行ひしに、爾等皆之を奇む。二二
モイセイ爾等に割禮を授けたり、(此れモイセイに由るに非
ずして、先祖に由ると雖、) 而して爾等安息日に於て人
に割禮を行ふ。二三 モイセイの律法の壞られざらん爲に、
人安息日に割禮を受くるに、爾等、我が安息日に於て人の
全身を愈し、に因りて、我に怒るか。二四 外貌に依りて審
する勿れ、乃義の審を以て審せよ。二五 是に於てイエ
サリムの或人人曰へり、此れ彼等が殺さんと謀る者に非ず
や。二六 視よ、彼明に語る、而して彼等は之に言ふ所な
し、豈有司等は彼を誠にハリストスなりと承け認めしか。
二七 然れども我等は斯の人の奚れよりするを知る、惟ハリス

トス來らん時は、其奚れよりするを知る者なからん。二八
厥時イイスス殿に於て、教へて、呼びて曰へり、爾等我を
も知る亦我の奚れよりするを知る、然れども我は己に由り
て來りしに非ず、乃我を遣し、眞なる者あり、爾等の知
らざる者なり。二九 我は彼を知る、蓋我を彼よりし、彼は我
を遣せり。三〇 是に於て彼等イイススを執へんと謀りたれ
ども、手を彼に措く者なかりき、彼の時未だ至らざればなり。
三一 民の中多くの者彼を信じて曰へり、ハリストス來らん時
は、豈斯の人の行ひしより多くの休徴を行はんや。三二
フアリセイ等は民が彼の事を斯く論ずるを聞けり、乃フア
リセイ等及び司祭諸長は彼を執へん爲に下吏を遣せり。三
三 イイスス曰へり、我尚暫く爾等と偕に在りて、我を遣
し、者に往かん。三四 爾等我を尋ねて遇はざらん、且我が在
る所には、爾等來る能はず。三五 イウデヤ人相語りて曰へ
り、彼は何に往きて、我等をして彼に遇はざらしめんか、
豈彼はエルリン民の中に散じ處る者に往きて、エルリン人を
教へんと欲するか。三六 彼が、爾我を尋ねて遇はざらん、
且我が在る所には爾等來る能はずと、言ひし言は何の謂
ぞや。三七 節筵の末の大なる日に、イイスス立ちて、呼び
て曰へり、人渴かば、我に來りて飲め。三八 我を信ずる者は、
聖書に云へる如く、其腹より活ける水の川は流れん。三九 之

を言ひしは、彼を信する者の受けんとする神を指せるなり、蓋聖神未だ降らざりき、イイスス未だ榮を受けざればなり。四〇民の中多くの者此の言を聽きて曰へり、斯の人は誠に預言者なり。四一他の者は曰へり、斯れハリストスなり。又他の者は曰へり、豈ガリレヤよりハリストス來らんや。四二聖書にはハリストスはダワイドの裔より、且ダワイドの居りし處なるワイフレムより來ると、云へるに非ずや。四三是に於て民の中に、彼の事に緣りて、紛論起りたり。四四其中に或る者彼を執へんと欲したれども、手を彼に措くなかりき。四五下吏は司祭諸長及びファリセイ等に返りたれば、彼等之に謂へり、爾等何ぞ彼を曳き來らざる。四六下吏答へて曰へり、人未だ嘗て斯の人の如く言ひしことあらず。四七ファリセイ等は彼等に答へて曰へり、豈爾等も惑はされしか。四八有司或はファリセイ等の中に彼を信ぜし者あるか。四九惟此の民、律法を識らざる者は、詛はるゝなり。五〇夜イイススに來りしニコデイル、彼等の中の一となる者は、彼等に謂ふ、五一豈我が律法は、未だ人の訴を聽かず、其行ふ所を知らざる先に、人を罪するか。五二彼等答へて曰へり、爾も亦ガリレヤよりするか、尋ねて見よ、預言者はガリレヤより起るなし。五三是に於て各其家に歸れり。

第八章 イイスス橄欖山に往けり。二朝早く復殿に來れるに、民皆彼に就き、彼坐して之を教へたり。三爰に學士等及びファリセイ等は淫に於て執へられたる婦を彼に曳き來り、之を中に立て、四彼に謂ふ、師よ、此の婦は今淫に於て執へられたり。五モイセイは律法に、我等に是くの若き者を石を以て撃ち殺すを命じたり、爾は何を言はんか。六彼等が之を言ひしは、イイススを試みて、彼を訴ふる由を得ん爲なり。イイスス顧みずして、躬を鞠めて、指を以て地に畫けり。七彼等問ひて已まざれば、イイスス起きて、彼等に謂へり、爾等の中罪なき者は、先づ石を以て之に投げよ。八復身を鞠めて、地に畫けり。九彼等之を聞き、其良心に責められ、長なる者より始めて、未なる者に至るまで、一一出で行き、イイスス獨遣り、及び婦中に立てり。一〇イイスス起きて、人無く、唯婦のみ在るを見て、之に謂へり、婦よ、爾を訴ふる者安に在るか、誰も爾を罪せざりしか。一一彼答へて曰へり、主よ、誰も無し。イイスス之に謂へり、我も爾を罪せず、往け、是より罪を犯す勿れ。一二イイスス復衆に語りて曰へり、我は世の光なり、我に従ふ者は暗を行かず、乃生命の光を獲ん。一三ファリセイ等彼に謂へり、爾自ら己の事を證す、爾の證は眞ならず。一四イイスス彼等に答へて曰へり、我自ら己の事を證す

とも、我が證は眞なり、蓋我は何れより來り、何れに往くを知る、爾等は我が何れより來り、何れに往くを知らず。一五 爾等肉に循ひて審す、我は何人をも審せず。一六 若し我審せば、我が審は眞なり、蓋我獨在るに非ず、すなはち我をおよ。一七 爾等の律法にも録乃 我及び我を遣し、父在るなり。一八 我は己の事を證す、せるあり、二人の證は眞なりと。一九 彼ら曰へり、我を遣し、父も又私の事を證するなり。二〇 爾等の父は安に在るか。二一 我は己の事を證す、も我が父をも識らず、若し爾等我を識らば、我が父をも識るならん。二二 此等の言は、イイスス殿に在りて教へし時、獻賽所に於て之を言へり、彼を執ふる者なかりき、彼の時未だ至らざればなり。二三 イイスス復彼等に謂へり、我は往く、爾等我を尋ねん、而して爾等の罪の中に死なん。我が往く所には爾等來る能はず。二四 イイスス曰へり、豈彼は己を殺さんか、蓋云ふ、我が往く所には爾等來る能はずと。二五 イイスス彼等に謂へり、爾等は下に屬し、我は上に屬す、爾等は斯の世に屬し、我は斯の世に屬せず。二六 故に我爾等に謂へり、爾等の罪の中に死なんと、蓋若し爾等は是れ我なりと信ぜずば、乃 爾等の罪の中に死なん。二七 彼等曰へり、爾は誰たる。イイスス彼等に謂へり、我は始より爾等に言ふ所の如き者なり。二八 我には爾等の

事に於て語り、且審すること多くあり、然れども我を遣し、者は眞なり、我彼より聞きし事を以て世に語ぐ。二九 彼等は其父を指して言ひしを悟らざりき。三〇 故にイイスス彼等に謂へり、爾等人の子を擧ぐる後、是れ我なりと知り、且我が己に由りて何事をも行はず、乃 我が父の我に教へし如く之を語るを知らん。三一 我を遣し、者は我と偕にす、父は我を遣して獨らしめず、蓋し我常に其悦ぶ所を行ふなり。三二 彼が此を語れる時、多くの者彼を信ぜり。三三 時にイイスス彼を彼を信ぜしイウデヤ人に謂へり、爾等若し常に我が言に居らば、眞に我が門徒たるなり。三四 爾等眞實を識らん、眞實は爾等を自由の者と爲さん。三五 彼に答へて曰へり、我等はアウラムの裔なり、未だ嘗て人の奴隸と爲らざりき、爾何ぞ自由の者と爲らんと言ふ。三六 イイスス彼らに答へて曰へり、我誠に爾等に語ぐ、凡そ罪を行ふ者は罪の奴隸なり。三七 然れども奴隸は永く家に居らず、子は永く居るなり。三八 故に若し子爾等を自由たらしめば、爾等は誠に自由の者と爲らん。三九 我爾等がアウラムの裔たるを知る、然れども爾等我を殺さんと謀る、蓋我が言は爾等の衷に容れられず。四〇 我は我が父に於て見し事を言ひ、爾等は爾等の父に於て見し事を行ふ。四一 彼に答へて曰へり、我等の父はアウラムなり。イイス

ス彼等に謂ふ、爾等若しアウラムの子たらば、アウラムの事を行ふならん。四〇然るに爾等今我即神より聞きたる眞實を爾等に語りし人を殺さんと謀る、アウラムは之を行はざりき。四一爾等は爾等の父の事を行ふ。彼に謂へり、我等は淫に由りて生れしに非ず、我等に一の父あり、即神なり。四二イイスス彼等に謂へり、若し神爾等の父たらば、爾等我を愛するならん、我神より出で、來りに因る、蓋我己に由りて來りしに非ず、乃彼は我を遣せり。四三爾等何ぞ我が語れる事を悟らざる、我が言を聴く能はざる故なり。四四爾等は爾等の父惡魔に屬し、爾等の父の慾を行はんと欲す。彼は始より殺人者にして、眞實に立たざりき、眞實其衷に在らざればなり。彼は誑を言ふ時、己に屬する者を言ふ、蓋彼は誑者且誑の父なり。四五然れども我眞實を言ふに因りて、爾等我を信ぜず。四六爾等の中誰か罪を以て我を責めん、若し、我眞實を言はざ、爾等我を信ぜざる。四七神の屬する者は神の言を聴く。爾等聽かざるは、神に屬せざる故なり。四八イウデヤ人彼に答へて曰へり、我等、爾がサマリヤ人にして、且魔鬼に憑らるゝ者なりと、言ふは宜ならずや。四九イイスス答へて曰へり、我は魔鬼に憑らるゝに非ず、乃我は我が父を尊び、爾等は我を辱む。五〇然れども我は己の榮を求めず、一

の求むる者、且審判する者あるなり。五一我誠に誠に爾等に語り、人若し我が言を守らば、世世に死を見ざらん。五二イウデヤ人彼に謂へり、今我等は爾が魔鬼に憑らるゝを知れり。アウラム死し、諸預言者も亦然り、而して爾言ふ、人若し我が言を守らば、世世に死を嘗めざらんと。五三爾豈我が父アウラム己に死せし者より大なるか、諸預言者も亦死せり、爾は己を誰とか爲す。五四イイスス答へて曰へり、若し我己を榮せば、我が榮は無に歸す。我を榮する者は我が父、即爾等が我等の神と言ふ所の者なり。五五爾等は彼を識らず我は彼を識る、若し我彼を識らずと言はざ、爾等の如き誑者と爲らん。然れども我は彼を識り、且彼の言を守る。五六爾等の父アウラムは甚我の日を見んことを望めり、彼且之を見、而して喜べり。五七イウデヤ人彼に謂へり、爾年尚五十に及ばざるに、アウラムを見しか。五八イイスス彼等に謂へり、我誠に誠に爾等に語り、アウラムの未だ有らざる先に、我在るなり。五九是に於て彼等石を取りて、彼を撃たんとせり、然れどもイイスス隠れて、其中を過ぎ殿を出で、去れり。

第九章 一 イイスス行く時、生れながら瞽なる人を見たり。二 門徒彼に問ひて曰へり、夫子斯の人の瞽にして生れしは、

是れ孰か罪を獲たる、彼か、抑其親か。三 イイス答へて曰へり、彼も罪を獲ず、其親も亦然り、乃彼に於て神の作爲の顯れん爲なり。四 我尚晝なる間、我を遣し、者の作爲を爲すべし、夜來る、其時は誰も爲す能はず。五 我世に在る時は、世の光なり。六 之を言ひて、地に唾し、唾を以て泥を成し、其泥を瞽の目に塗りて、七之に謂へり、往きて、シロアムの池に洗へ。(シロアム、譯すれば、遣されし者なり。) 彼往きて洗ひ、見るを得て來れり。八 其隣の人及び先に彼が瞽なるを見し者曰へり、此れ坐して乞ひし者に非ずや。九 或曰へり、是は彼なり、或曰へり、彼に似たる者なり、彼は曰へり、是は我なり。一〇 彼等之に謂へり、爾の目は如何にして啓けたるか。二 彼答へて曰へり、イイスと名づくる人、泥を成して、我が目に塗りて、我に謂へり、シロアムの池に往きて洗へと、我往きて洗ひて見るを得たり。二 彼等曰へり、其人安に在るか。曰く、我知らず。一三 此の瞽たりし者をフアリセイ等に攜へ至る。一四 イイスが泥を成して、其目を啓きし日は、安息日なり。一五 フアリセイ等も亦其如何に見るを得たるを問ひたれば、答へて曰へり、泥を私の目に置き、我洗ひて見るを得たり。一六 フアリセイ等の中の或者曰へり、斯の人は神よりするに非ず、安息日を守らざればなり。他の者曰へり、罪ある人は安ぞ

かくの如き奇蹟を行ふを得ん。是に於て彼等の中に紛論ありき。一七 復瞽者に謂ふ、爾は彼の事に於て何を言はんか。蓋彼は爾の目を啓きたり。曰く、是れ預言者なり。一八 イウデヤ人は其素瞽にして、後に見るを得たるを信ぜずして、此の見るを得たる者の二親を呼び至らしむるを待ちて、一九之に問ひて曰へり、此れ爾等の子、爾等が瞽にして生れたりと曰ふ者なるか、今如何にして見るか。二〇 其親彼等に答へて曰へり、此れ我が子なること、亦其瞽にして生れたることは、我等之を知る、二 然れども今如何にして見るか、我等之を知らず、或は誰か其目を啓きしを我等知らず。彼は年長ぜり、彼に問ふべし、自ら己の事を語らん。二三 親の斯く言ひしは、イウデヤ人を懼れしに因りてなり、蓋イウデヤ人已に相謀りて、若し人彼をハリストスと認めば、會堂より黜けらるべしと定めたり。二三 是の故に其親は、彼は年長ぜり、彼に問ふべしと曰へり。二四 是に於て瞽たりし人を再呼びて、之に謂へり、光榮を神に歸せよ、我等は斯の人の罪人たるを知る。二五 彼答へて曰へり、其罪人たりや否や、我之を知らず、惟一の事を知る、即ち我本瞽たりしに、今は見る。二六 又之に謂へり、彼は何を爾に爲し、か、如何にして爾の目を啓きし。二七 答へて曰へり、我已に爾等に言へり、而して爾等聴かざりき、何ぞ

復聞かんと欲する、豈爾等も彼の門徒と爲らんと欲するか。
二八 彼等之を誦りて曰へり、爾は其門徒、我等はモイセイの門徒なり。二九 我等は神がモイセイに語りしを知る、然れども斯の人の愛れよりするを知らず。三〇 其人答へて彼等に謂へり、此は奇しき事なり、爾等は彼の愛よりするを知らず、然るに彼は我が目を啓きたり。三一 我等は神が罪人に聴かざるを知る、然れども若し人神を敬ひ、其旨を行はゞ、斯の人に聴く。三二 世の始より以來、未だ人の生ながら瞽なる者の目を啓きしを聞かざりき。三三 若し、斯の人神よりにせしに非ずば、何事をも行ふを得ざりしならん。三四 彼等之に答へて曰へり、爾は全く罪の中に生れたり、而して爾我等を教ふるか。遂に彼を外に逐ひ出せり。三五 イイススは其彼を逐ひ出だし、を聞きて、彼に遇ひて曰へり、爾神の子を信ずるか。三六 彼答へて曰へり、主よ、是れ誰なるか、我が彼を信ぜん爲なり。三七 イイスス之に謂へり、爾已に彼を見たり、且爾と語る者は是なり。三八 彼曰へり、主よ、我信ず、乃彼を拜せり。三九 イイスス曰へり、我審判の爲に世に來れり、見ざる者は見、見る者は瞽と爲らん爲なり。四〇 彼と偕に在りしファリセイ等の中の或者之を聞きて、彼に謂へり、豈我等も瞽なるか。四一 イイスス彼等に謂へり、爾等若し瞽ならば、罪なからん、然れども今爾等は我等見

ると言ふに因りて、爾等の罪尚存す。

第十章 一 我誠に誠に爾等に語り、羊の牢に入るに、門よりせずして、他の處より踰ゆる者は竊盜なり、強盜なり。二 門より入る者は羊の牧者なり。三 門を守る者は彼の爲に啓き、羊は其聲を聴く、己の羊の名を呼びて、之を引き出す。四 己の羊を出す時、之に先だちて行き、羊彼に従ふ、其聲を識るが故なり。五 疎き者には從はず、乃之より逃ぐ、疎き者の聲を識らざるが故なり。六 イイスス此の譬を彼等に謂へり、然れども彼等は其語りしことの何たるを悟らざりき。七 故にイイスス復彼等に謂へり、我誠に誠に爾等に語り、我は羊の門なり。八 凡そ我より先に來りし者は、竊盜なり、強盜なり、然れども羊は彼等に聴かざりき。九 我は門なり、我に由りて入る者は救を得、且入り且出で、草場を得ん。一〇 盜の來るは、唯盜み、殺し、滅さん爲のみ。我の來りしは、其生命を有ち、且豊に之を有たん爲なり。二 我は善き牧者なり、善き牧者は己の生命を羊の爲に捐つ。三 牧者ならざる備者、羊の己に屬せざる者は、狼の來るを見て、羊を棄て、逃ぐ、狼は羊を奪ひ、又之を散らす。四 備者は逃ぐ、其備者たるを以てなり、羊を顧みず。五 我善き牧者にして、我に屬する者を識り、

我に屬する者も亦我を識る。一五 父の我を識るが如く、我も亦父を識る、且我が生命を羊の爲に捐つ。一六 我に又他の羊、此の牢に屬せざる者あり、我は彼等をも引くべし、彼等は我が聲を聽かん、而して一の群一の牧者と爲らん。一七 父の我を愛する所以は、此れ蓋我は我が生命を捐つ。復之を受けん爲なり。一八 孰も之を我より奪ふなし、乃我自之を捐つ。我に之を捐つる權あり、復之を受くる權あり。我は此の誠を我が父より受けたり。一九 此の言に縁りて、復イウデヤ人の間に紛論起れり。二〇 其中多くの者曰へり、彼は魔鬼に憑られて狂ふなり、何ぞ彼に聽く。二一 他の者の曰へり、此れ魔鬼に憑依らるゝ者の言に非ず、豈魔鬼は瞽者の目を啓くを得んや。二二 イエルサリムに重修節あり、時方に冬なり。二三 イイスス殿に在りて、ソロモンの廊を歩めるに、二四 イウデヤ人彼を環りて曰へり、爾何時まで我等を疑惑せしむる、若し爾ハリストスならば、明に我等に告げよ。二五 イイスス彼等に答へて曰へり、我爾等に告げたり、而して爾等信ぜず、我の我が父の名に因りて行ふ事は、我が爲に證を作す。二六 然れども爾等信ぜず、蓋爾等は我に屬する羊に非ず、我が爾等に言ひしが如し。二七 我が羊は私の聲を聽く、我は彼等を識り、彼等は我に従ふ。二八 我は彼等に永遠の生命を與ふ、彼等は世世に滅

びず、誰も彼等を我が手より奪はざらん。二九 彼等を我に與へし我が父は萬有より大なり、誰も我が父の手より彼等を奪ふ能はず。三〇 我と父とは一なり。三一 時にイウデヤ人復石を取りて、彼を撃たんとせり。三二 イイスス彼等に答へて曰へり、我は多くの善き事を我が父より爾等に示せり、其中何の事に由りて、石を以て我を撃つか。三三 イウデヤ人彼に答へて曰へり、我等は善き事の爲に石を以て爾を撃つに非ず、乃褻瀆の爲、爾が人として己を神と爲すが爲なり。三四 イイスス彼等に答へて曰へり、爾等の律法に録されしに非ずや、我曰へり、爾等は神なりと。三五 若し神の言を奉ぜし者を神と名づけ、而して聖書廢する能はずば、三六 爾等は父が成聖して世に遣し、者に、其我は神の子なりと云ひしに因りて、爾瀆すと曰ふか。三七 若し我が父の事を行はずば、我を信する勿れ。三八 若し之を行はざ、我を信ぜずとも、我が事を信ぜよ、父の我在り、我も父に在るを知りて、信ぜん爲なり。三九 是に於て復彼を執へんと謀りたれども、彼は其手を避けたり。四〇 復イオルダンの外に、イオアンが先に洗を授けし處に往きて、彼處に居たり。四一 多くの者彼に來り、且曰へり、イオアンは何の休徴を行はざりき、然れどもイオアンが彼を指して言ひし事は、皆眞なり。四二 彼處に於て多くの者彼を信ぜり。

第十一章 一病める者あり、ラザリと云ふ、ワイファニヤ、
即マリヤ及び其姉妹マルファの村の人なり。二マリヤは
すなほちにほひあぶら 髪を以て其足を拭ひし者して、病
即 香膏を主に膏り、髪を以て其足を拭ひし者して、病
めるラザリは彼の兄弟なり。三姉妹はイイススに人を遣し
て日へり、主よ、爾の愛する者は病めり。四イイスス之を聞
きて日へり、此の病は死を致さず、乃神の光榮を致さん、
神の子が之に由りて榮せられん爲なり。五イイススはマルフ
ア及び其姉妹とラザリとを愛せり。六既に彼病めりと聞き
て、仍其在りし處に留れること二日なり。七其後門徒に謂
ふ、我等復イウデヤに往かん。八門徒彼に謂ふ、夫子、イウ
デヤ人近ごろ石を以て爾を撃たんと謀れり、爾復彼處に往
くか。九イイスス答へて日へり、一日には十二時あるに非ず
や、人若し晝に行かば蹶かず、此の世の光を見るに因りて
なり。一〇人若し世に行かば、蹶く彼に光なきに因りてな
り。一一此を言ひし後、彼等に謂ふ、我等の友ラザリ寝ねた
り、然れども我往きて、彼を醒ますさん。一二門徒日へり、主
よ、彼若し寝ねたらば、愈えん。一三イイスス彼の死の事を言
ひしに、彼等其寝ねて臥める事を言ふと意へり。一四其時イ
イスス明に彼等に謂へり、ラザリは死せり。一五而して我
は、我が彼處に在らざりしを、爾等の爲に喜ぶ、爾等を信

ぜしめん爲なり、然れども彼に往かん。一六フォオマ又デイデ
イムと名づくる者、同門徒に謂へり、我等も往きて、彼と偕
に死なん。一七イイスス來りて、ラザリの已に墓に葬られ、
四日なるに遇へり。一八ワイファニヤはイエルサリムに近
し、相去ること約十五小里なり。一九イウデヤ人多くマル
ファ及びマリヤに來れり、其兄弟の事に緣りて彼等を慰め
ん爲なり。二〇マルファはイイススの來るを聞きて往きて、
彼を迎へたり、仍マリヤは家に坐せり。二一マルファはイイ
ススに謂へり、主よ、爾若し此に在りしならば、我が兄弟
は死せざりしならん。二三然れども我知る、今も爾が凡そ神
に求めん者は、神爾に賜はん。二四イイスス之に謂ふ、爾
の兄弟は復活せん。二五マルファ曰く、我は末の日の復活
の時に彼が復活せんことを知る。二六イイスス之に謂へり、
我は復活なり、生命なり、我を信する者は死すと雖生き
ん。二六凡そ生きて我を信する者は、世世に死せざらん。
爾之を信するか。二七曰く、主よ、然り、我は爾が世に來
るべきハリストス、神の子たるを信ぜり。二八之を言ひて後、
往きて、潛に其姉妹マリヤを呼びて日へり、師來りて、爾
を呼ぶ。二九マリヤ此を聞き、亟に起ちて、彼に往けり。
三〇時にイイスス未だ村に入らずして、仍マルファが彼を迎
へし所にあり。三一マリヤと偕に家に在りて、之を慰めし

イウデヤ人は、其亟に起ちて出でしを見て、之に隨へり、曰ふ、彼は墓に往きて、彼處に哭かんと。三三マリヤはイイスの在りし所に來り、彼を見て、其足下に俯伏して曰へり、主よ、爾若し此に在りしならば、我が兄弟は死せざりしならん。三三 イイス彼が哭き、又彼と偕に來りしイウデヤ人の哭くを見て、心に哀みて、自ら惻めり、三四 曰く、爾等何處に彼を置きしか。彼に謂ふ、主よ、來りて觀よ。三五 イイス泣けり。三六 イウデヤ人曰へり、觀よ、其彼を愛せしこと如何ばかりぞ。三七 其中の或者曰へり、瞽者の目を啓きたる此の人は、彼を死せざらしむる能はざりしか。三八 イイス復衷に哀みて、墓に來る。之洞にして、其上に石を置けるあり。三九 イイス曰く、石を去れ。死者の姉妹マルファ彼に謂ふ、主よ、已に臭し、蓋彼死して四日なり。四〇 イイス之に謂ふ、我爾に、若し信ぜば、神の光榮を見んと、云ひしに非ずや。四一 是に於て彼等石を死者の置きたる所より去れり。イイス目を上に擧げて曰へり、父よ、爾が我に聴きしを、我爾に感謝す。四二 我は爾が常に我に聴くを知れり、然れども環り立てる民の爲に之を言へり、彼等の爾が我を遣し、ことを信ぜん爲なり。四三 之を言ひて、大なる聲を以て呼べり、ラザリよ、外に出でよ。四四 死せし者出でたり、手足は布に纏かれ、面は巾に裏まれたり。

イイス彼等に謂ふ、之を釋きて行かしめよ。四五 其時マリヤに來りてイイスの行ひし事を見たるイウデヤ人の中の多くの者彼を信ぜり。四六 然れども其中の或者はファリセイ等に往きて、之にイイスの行ひし事を告げたり。四七 是に於て司祭諸長及びファリセイ等は公會を集めて曰へり、我等何を爲さんか、蓋此の人は多くの奇蹟を行ふ。四八 若し是くの如く彼を舍かば、人皆彼を信ぜん、而して 로마 人來りて、我等の地をも民をも奪はん。四九 其中の一人なるカイアフア、是の歳司祭長たる者は、彼等に謂へり、爾等何をも知らず、五〇 又一人民の爲に死して、全民滅びざらん事の、我等に益あるを思はず。五一 彼の之を言ひしは、己に由るに非ず、乃是の歳の司祭長として、イイスの民の爲に死せんとするを預言せしなり。五二 是れ特斯の民の爲のみならず、乃亦散じたる神の諸子をひとつに集めん爲なり。五三 是の日より彼等相議して、イイスを殺さんと決せり。五四 故にイイスはより顯にイウデヤ人の中を行かず、乃彼處より野に近き地、エフライムと名づくる邑に往きて、此に門徒と偕に居たり。五五 イウデヤの逾越節近づきたれば、多くの者は、己を潔めん爲に、逾越節に先だちて、地方よりイエルサリムに上れり。五六 衆イイスを尋ね、殿に立ちて、相語りて曰へり、爾等如何に意ふか、彼は節筵に來ら

ざらんか。五七 司祭諸長及びファリセイ等は令を出して云へり、若し人彼の在る所を知らば、之を告ぐべし、彼を執へん爲なり。

第十二章 一 逾越節の前六日、イイススワイファニアに來れり、即ラザリ嘗て死して彼が死より復活せしめし者の居る所なり。二 彼處に於て彼の爲に晚餐を設けたり、マルファ供事し、ラザリは彼と偕に席坐せし者の一たり。三 マリヤは純良なる「ナルド」の價貴き香膏一斤を執りて、イイススの足に膏り、己の髪を以て其足を拭へり、家は香膏の香氣に満たされたり。四 其門徒の一、シモンの子イウダ「イスカリオト」、即彼を賣らんとする者曰く、五 何ぞ、此の香膏を銀三百に售りて、貧しき者に施さざりし。六 彼の之を言ひしは、貧しき者を慮る爲に非ず、即竊者たるに因りてなり。彼は金匣を持ち、其内に藏めたる者を攜へたり。七 イイスス曰へり、彼を捨て、彼は我が葬の日の爲に此を貯へたり。八 蓋貧しき者は常に爾等と偕にす、我は常に爾曹と偕にするにあらず。九 イウデヤの衆くの民は彼の彼處に在るを知りて、獨イイススの爲のみならず、乃其死より復活せしめしラザリをも見ん爲に來れり。一〇 司祭諸長はラザリをも殺さん事を謀りたり、二 蓋彼の故

に因りて、多くのイウデヤ人往きて、イイススを信ぜり。一 二 明日、節筵の爲に來りし衆くの民は、イイススのイエルサリムに來るを聞きて、二三 櫻欄の枝を取り、出で、彼を迎へ、呼びて曰へり、「オサンナ」、主の名に因りて來るイズライリの王は祝福せらる。一四 イイスス小驢を獲て、之に乗れり、録されしが如し、云く、一五 シオンの女よ、懼るゝ勿れ、視よ、爾の王は小驢に乘りて臨むと。一六 彼の門徒は初此を曉らざりき、然れどもイイススの榮せられし後、此の事の彼を指して録され、且之を彼に行ひしを憶ひ起せり。一七 先にイイススと偕に在りし民は、彼がラザリを墓より呼び出して、之を死より復活せしめし事を證せり。一八 此に緣りて民は彼を迎へたり、蓋彼が此の奇蹟を行ひしを聞けり。一九 ファリセイ等相語りて曰へり、豈爾等が謀る所の一も益なきを見ざるか、視よ、世は皆彼に従へり。二〇 節筵に、禮拜する爲に上りたる者の中にエルリン人あり。二 彼等はガリレヤのワイフサイダの人なるフリリップに就きて、之に請ひて曰へり、君よ、我等イイススを見んことを望む。三 フリップ來りて、アンドレイに告げ、アンドレイ及びフィリップは又之をイイススに告ぐ。三 イイスス彼等に答へて曰へり、人の子の榮せらるゝ時至れり。二四 我誠に誠に爾等に告ぐ、麥の粒若し地に遺ちて死

なずば、獨存す、若死なば、多くの實を結ぶ。二五 己の生命を愛する者は、之を喪はん、己の生命を斯の世に惡む者は、永生の爲に之を護らん。二六 人若し我に事へば、我に従ふべし、我が在る所は、我に事ふる者も亦彼處に在らん。人若し我に事へば、我が父彼を貴ばん。二七 今我が靈は傷めり、我何をか言はん、父よ、我を斯の時より救へ、然れども我は特に斯の爲に來れり。二八 父よ、爾の名を榮せよ。時に天より聲來りて、云ふ、我已に之を榮せり、且復之を榮せん。二九 旁に立ちて聞きし民は曰へり、雷の震ひしなり、他の者は曰へり、天使の彼に語りしなり。三〇 イイスス答へて曰へり、此の聲の有りしは、我の爲に非ず、乃爾等の爲なり。三一 今斯の世は審判せらる、今斯の世の君は外に逐はれん。三二 我が地より擧げられん時は、衆を引きて我に就かしめん。三三 彼が此を言ひしは、其何の死を以て死せんとするを示し、なり。三四 民彼に對へて曰へり、我等律法に、ハリストスは世に存すと云へるを聞けり、爾何ぞ人の子は擧げらるべしと言ふ、此の人の子は誰ぞ。三五 イイスス彼等に謂へり、尙少時光は爾等と偕に在り、光ある間にゆけ、暗の爾等を蔽はざらん爲なり、暗に行く者は何へ往くを知らず。三六 爾等光ある間に光を信ぜよ、光の子と爲らん爲なり。イイスス既に此を言ひ、彼等を離れて、

隠れたり。三七 彼は斯く多くの休徴を彼等の前に行ひたれども、尚彼を信ぜざりき、三八 預言者イサイヤの言に應ふを致す、云く、主よ、誰か我等より聞きし事を信じたる、主の臂は誰にか顯れたると。三九 彼等が信すること能はざりしは、蓋しイサイヤの復言ひしが如く、四〇 其目を瞽にして、其心を頑にせり、恐らくは目にて視、心にて悟り、轉じて我が彼等を醫さんと。四一 イサイヤの之を言ひしは、彼之光榮を見、彼を指して語りし時にあり。四二 然るに有司の中にも多くの者は彼を信ぜり、惟フアリセイ等の故に因りて、之を顯さざりき、會堂より逐はれざらん爲なり。四三 蓋人の光榮を愛せしこと、神の光榮に過ぎたり。四四 イイスス呼びて曰へり、我を信する者は、我を信するに非ず、乃我を遣し、者を信するなり。四五 我を見る者は、我を遣し、者を見るなり。四六 我は光にして世に來れり、凡そ我を信する者は、暗に居らざらん爲なり。四七 若し人我が言を聞きて信ぜずば、我彼を定罪せず、蓋我が來りしは、世を定罪せん爲に非ず、乃世を救はん爲なり。四八 我を拒みて、我が言を納れざる者には、之を定罪する者あり、即我が語りし言なり、此れ末の日に於て彼を定罪せん。四九 蓋我は己に由りて語りしに非ず、即我を遣し、父は、彼我に言ふべき事、語るべき事を命ぜり。五〇 我は其命の永遠の生命

なるを知る。故に我が語る所は、父の我に言ひし如く語るなり。

第十三章 一 逾越節筵の前に、イエス既に己が此の世を離れて、父に逝く時の至りしを知りて、世に在る己に屬する者を愛して、終に至るまで之を愛せり。二 晚餐の時、悪魔己にシモン子イウダ「イスカリオト」の心に彼を賣る意を入れしに、三 イエスは、父が萬物を其手に授け、且己が神より出で、亦神に逝くを知りて、四 晚餐より起ち、其衣を釋き、手巾を取りて、自ら帶にし、五次ぎて水を盤に盛りて始めて門徒の足を濯ひ、帶にしたる手巾を以て之を拭へり。六 シモンペトルに來れるに、彼曰く、主よ、爾我が足を濯ふか。七 イエス之に答へて曰へり、我が行ふ所は、爾今知らず、後に之を悟らん。八 ペトル彼に謂ふ、爾永く我が足を濯はざらん。イエス答へて曰へり、若し我爾を濯はずば、爾は我と分なし。九 シモンペトル彼に謂ふ、主よ、止我が足のみならず、乃亦手と首と。一〇 イエス之に謂ふ、既に洗はれたる者は、足の外に濯ふを要せず、蓋身皆潔し、爾等も潔し、然れども盡く然るには非ず。一一 蓋彼は己を賣らんとする者を知れり、故に盡く潔きには非ずと云へり。一二 既に彼等の足を濯ひて、己の衣

を衣、復席坐して、彼等に謂へり、我が爾等に行ひし事を知らるか。一三 爾等我を呼びて師と爲し、主と爲す、爾等の言ふ所善し、蓋我は是なり。一四 故に若し我、主又師たるに、爾等の足を濯ひしならば、爾等も互に足を濯ふべし。一五 蓋我爾等に模範を與へたり、我が爾等に行ひし如く、爾等も行はん爲なり。一六 我誠に誠に爾等に語ぐ、僕は其主より大ならず、使者は之を遣し、者より大ならず。一七 爾等若し之を知りて、之を行はざ、福なり。一八 我盡く爾等を指して言ふに非ず、我は選びたる者を知る。然れども聖書の言ふ所に應ふを致す、云く、我と與に餅を食ふ者は、我に向ひて其踵を擧げたりと。一九 未だ成らざる先に、我預め爾等に謂ふ、其成るに及びて、爾等の是れ我なりと信ぜん爲なり。二〇 我誠に誠に爾等に語ぐ、我が遣す者を接くる者は、我を接くるなり、我を接くる者は、我を遣し、者を接くるなり。二一 イエス此を言ひし後、心傷みて、證して曰へり、我誠に誠に爾等に語ぐ、爾等の中の一人は我を賣らん。二三 門徒相視て、其誰を指して言ふかと異めり。二四 門徒の一、イエスの愛せし者は、イエスの懷に倚りて席坐せり。二五 シモンペトル彼に首を以て意を示して、其言ふ所の誰たるを問はしめたり。二六 彼はイエスの胸に就きて言ふ、主よ、是れ誰なるか。二六

イイスス答へて曰く、我が餅の片を蘸して與へんとする者是なり。乃片を蘸して、シモンの子イウダ「イスカリオト」に與へたり。二七片を受けし後に、サタナ彼の中に入れり。イイスス彼に謂ふ、爾が爲す所の事は、速に之を爲せ。二八然れども席坐せる者は、一も其何の意を以て之を言ひしか悟らざりき。二九蓋イウダが金匣を管れるに因りて、或者は、イイスス彼に、我等が節筵に需るべき物を市へと云ひ、或は、貧しき者に何をか施さしむると意へり。三〇彼は片を受けて、直に出でたり、時正に夜なり。三一彼の出でし後、イイスス曰く、今人の子は榮せられたり、神も亦彼の中に榮せられたり。三二若し神は彼の中に榮せられしならば、神も亦彼を己の内に榮せん、且速に彼を榮せん。三三小子よ、我尚暫時爾等と偕にす、爾等我を尋ねん、而して我が曾てイウダヤ人に、我が往く所には爾等來る能はずと、云ひし如く、今爾等にも亦云ふなり。三四我新なる誠を爾等に與ふ、即爾等相愛すべし、我が爾等を愛するが如く、爾等も是くの如く相愛すべし。三五爾等若し相愛せば、人皆此に由りて、爾等の我が門徒たるを知らん。三六シモンペトル彼に謂ふ、主世爾何にか往く。イイスス之に答へて曰へり、我が往く所には、爾今我に従ふ能はず、然れども後我に従はん。三七ペトル彼に謂ふ、主よ、我胡爲

れぞ今爾に従ふ能はざる、我爾の爲に我が生命を捐てん。三八イイスス之に答へて曰へり、爾の生命を我が爲に捐てんか、我誠に誠に爾等に語り、鶏の鳴かざる前に、爾三次我を諱まん。

第十四章 一 爾等の心擾る、母れ、神を信じ、亦我を信ぜよ。二 我が父の家に第宅多し。然らずば、我爾等に言ひしならん、我往きて、爾等の爲に所を備へん。三 往きて、爾等の爲に所を備へば、復來りて、爾等を接けて、我に就かしめん、我が居る所に爾等も居らん爲なり。四 我が何處に往くを爾等知り、其道をも知る。五 フオマ彼に謂ふ、主よ、我等は爾の何處に往くを知らず、焉ぞ其道を知るを得ん。六 イイスス之に謂ふ、我は道なり、眞實なり、生命なり、人若し我に由らずば、父に來るなし。七 爾等若し我を識らば、我が父をも識らん。今より爾等彼を識り、且彼を見たり。八 フィリップ彼に謂ふ、主よ、我等に父を示せ、然らば我等に足る。九 イイスス之に謂ふ、フィリップよ、我斯く久しく爾等と偕にするに、爾未だ我を識らざるか。我を見し者は、父を見しなり、如何ぞ爾我等に父を示せと云ふ。一〇 我の父に居り、父の我に居ることを爾信ぜざるか。我が爾等に言ふ所の言は、己に由りて言ふに非ず、我に居る父は、彼事

を行ふなり。二一 爾等、我が父に居り、父も我に居ると云ふを、我に信ぜよ、然らずば、其事に縁りて我に信ぜよ。一
 二 我誠に誠に爾等に語り、我を信する者は、我が行ふ所の事を、彼も亦行はん、且此より大なる者を行はん、蓋我は我が父に往く。二三 爾等凡そ我が名に因りて求めん者は、我之を行はん、父が子の中に榮せられん爲なり。二四 爾等我が名に因りて求めん者は、我行はん。二五 爾等若し我を愛せば、我が誠を守れ。二六 我父に求めん、彼は別に無恤者を爾等に與へて、世世に爾等と偕に居らしめん、
 二七 卽眞實の神にして、世は彼を接くる能はず、其彼を見ず、又彼を識らざる故なり、爾等は彼を識る、蓋彼は爾等と偕に居り、且爾等の衷に在らん。二八 我爾等を捨て、孤子とせず、我爾等に來らん。二九 尚頃くして、世は復我を見ず、然れども爾等我を見ん、蓋我は生く、爾等も亦生きん、三〇 其日に爾等は我の我が父に居り、爾等の我に居り、我も爾等に居るを知らん。三一 我が誠を有ちて、之を守る者は、是れ 卽 我を愛する者なり、我を愛する者は、我が父に愛せられん、我も彼を愛し、且己を彼に顯はさん。
 三二 イウダ、「イスカリオト」ならざる者、彼に謂ふ、主よ、胡爲れぞ爾は己を我等に顯さんと欲して、世には然せざる。三三 イイスス之に答へて曰へり、人若し我を愛せば、我

が言を守らん、我が父も彼を愛せん、且我等彼に來りて、彼に住居を爲さん。二四 我を愛せざる者は、我が言を守らず、爾等が聞く所の言は、我が言に非ず、乃我を遣し、父の言なり。二五 我爾等と偕に在りて、此を爾等に言へり。
 二六 無恤者、卽 聖神、父が我の名に縁りて遣さんとする者は、彼凡の事を爾等に教へ、且我が爾等に言ひし事を、皆爾等に記念せしめん。二七 我平安を爾等に遣す、我が平安を爾等に與ふ、我が爾等に與ふるは、世の與ふるが如きに非ず、爾等の心擾るゝ母れ、又懼るゝ母れ。二八 我往きて、復爾等に來らんと、我が言ひしことは、爾等之を聞けり。爾等若し我を愛せば、我父に往くと云ひしに縁りて喜ばん、蓋我が父は我より大なり。二九 我今事の未だ成らざる先に、爾等に言へり、其成らん時に、爾等の信ぜん爲なり。三〇 我既に爾等と語らんこと多からず、蓋此の世の君は來る、彼は我の中に有つ所なし。三一 然れども世の我が父を愛し、父が我に命ぜし如く行ふを知らん爲に、起ちて、此より往かん。

第十五章 一 我は眞の葡萄の樹、我が父は園師なり。二 凡そ我に在りて實を結ばざる枝は、彼之を去り、凡そ實を結ぶ者は、之を潔む、其益繁く實を結ばん爲なり。三 爾等既

に我が爾等に語りし言に由りて潔められたり。四 爾等我が居れ、我も爾等に居らん。枝若し葡萄の樹に居らずば、自ら實を結ぶ能はず、爾等も若し我に居らずば、亦是くの如し。五 我は葡萄の樹、爾等は枝なり、我に居り、我も彼に居る所の者は、斯の者多くの實を結ぶ、蓋爾等我無くしては、何事をも行ふ能はず。六 人若し我に居らずば、枝の如く外に棄てられて枯る、此くの如き枝を集めて、火に投ず、此れ乃焚く。七 爾等若し我に居り、我が言爾等に居らば、凡そ望む所を求めよ、然らば爾等に成らん。八 爾等若し多くの實を結ばば、我が父は此に由りて榮せられん、爾等の我が門徒と爲らん。九 父の我を愛するが如く、我も爾等を愛す、爾等我が愛に居れ。一〇 爾等若し我が誠を守らば、我が愛に居らん、我も我が父の誠を守りて、其愛に居るが如し。一一 我が此を爾等に語りしは、我が喜の爾等に居り、爾等の喜の全からん爲なり。一二 我が爾等を愛するが如く、爾等相愛すべし、此れ我の誠なり。一三 人其友の爲に生命を捐つるは、愛此より大なるはなし。一四 爾等若し我が爾等に誠むる事を行はゞ、即我が友たり。一五 我既に爾等を僕と曰はず、蓋僕は其主の行ふ所を知らず、乃 爾等を友と曰へり、凡そ我が父より聞きし所を爾等に告げしに縁る。一六 爾等我を選びしに非ず、我は爾等を

選び、爾等を立てたり、爾等が往きて、實を結び、且爾等の實の存せん爲、爾等が凡そ我が名に因りて父に求むる所は、彼爾等に與へん爲なり。一七 我此を爾等に誠む、爾等相愛すべし。一八 世若し爾等を惡まば、爾等に先だちて我を惡めりと知れ。一九 爾等若し世に屬せば、世は己に屬する者を愛せん、然れども爾等は世に屬せず、乃我は爾等を世より選べり、此に由りて世は爾等を惡む。二〇 我が嘗て爾等に、僕は其主より大ならずと、云ひし言を憶へ。人若し我を窘逐せば、爾等をも窘逐せん。若し我が言を守らば、爾等の言をも守らん。二一 然れども是皆我の名に由りて爾等に行はん、我に遣し、者を識らざる故なり。二二 我若し來りて、彼等に言はざりしならば、彼等罪なからん、然れども今は其罪を辭するを得ず。二三 我を惡む者は我が父をも惡む。二四 我若し彼等の中に、他の者の未だ爲ざりし事を行はざりしならば、彼等罪なからん、然れども今彼等は我及び我が父を己に見、且惡めり。二五 是くの如く彼等の律法に、故なくして我を惡めりと、錄せる言應へり。二六 我が父より爾等に遣さんとする無恤者、眞實の神、父より出づる者は來らん時、彼我の事を證せん。二七 爾等も亦證せん、始より我と偕に在るに因りてなり。

第十六章 一 我が此を爾等に語りしは、爾等の躓かざらん爲なり。二人爾等を會堂より逐はん、且凡そ爾等を殺す者は、此を以て神に奉事すと意ふ時至らん。三 此等の事を

行はんとするは、父と我とを識らざるに因りてなり。四 然れども我が此を爾等に語りしは、爾等が、時の至るに及びて、我が此を爾等に言ひしを憶ひ起さん爲なり、初より此を爾等に言はざりしは、爾等と偕に在りし故なり。五 今我を遣し、者に往く、而して爾等の中我に、何を往くと、問ふ者なし。六 惟我が此を爾等に語りしに因りて、憂は爾等の心に盈てり。七 然れども我真を爾等に語り、我が往くは爾等の爲に益あり、蓋若し我往かずば、撫恤者爾等に來らざらん、我往かば、彼を爾等に遣さん。八 彼來りて、罪に於て、義に於て、審判に於て、世を責めん。九 罪に於ては、其我を信ぜざるに因りてなり、一〇 義に於ては、我は我が父に往き、爾等復我を見ざらんとするに因りてなり、一一 審判に於ては、此の世の君の審判せられしに因りてなり。一二 我尚多く爾等に言ふべき事あれども、爾等今容るゝ能はず。一三 然れども彼、即眞實の神、來らん時、爾等を凡の眞實に導かん、蓋彼は己に由りて言はんとするに非ず、乃聞かんとする事を云はん、且將來の事を爾等に示さん。一四 彼は我を榮せん、蓋我に屬する者より取りて、爾等

に示さん。一五 凡そ父の有つ所の者は我に屬す、故に我、彼

は我に屬する者より取りて、爾等に示さんと曰へり。一六 頃して爾等我を見ざらん、復頃して我を見ん、蓋我父に往く。一七 是に於て其門徒の或者相語りて曰へり、彼が我等に、頃して我を見ざらん、復頃して我を見ん、且我父に往くと云ふは、是れ何ぞや。一八 故に曰へり、彼が頃と云ふは、此れ何事ぞや、我等其言ふ所を知らず。一九 イイスは其己に問はんと欲するを知りて、彼等に謂へり、我が頃して我を見ざらん、復頃して我を見んと、云ひしを爾等相尋ぬるか。二〇 我誠に誠に爾等に語り、爾等は哭き哀まん、世は喜ばん、爾等は憂へん、然れども爾等の憂は變じて喜とならん。二一 婦は産むに及びて、憂を懷く、其時至ればなり、然れども子を生みし後は、喜に因りて復苦を憶はず、人世に生れたればなり。二二 是くの如く爾等も今憂を懷く、然れども我復爾等を見ん、而して爾等の心は喜ばん、且其喜を爾等より奪ふ者なし。二三 其日に於て爾等我に問ふ所なからん、我誠に誠に爾等に語り、凡そ我が名に因りて父に求むる所は、彼爾等に與へん。二四 今に至るまで爾等我が名に因りて求むる所なかりき、求めよ、然らば得ん、爾等の喜の全からん爲なり。二五 我譬を以て此等の事を爾等に語れり、然れども

復讐を以て爾等に語らず、乃明に父の事を爾等示す時至らん。二六 其日に於て爾等我が名に因りて求めん、而して我爾等の爲に父に願はんと曰はず、二七 蓋父親ら爾等を愛す、爾等が我を愛し、且我が神より出でしことを信ぜしに因りてなり。二八 我は父より出で、世に來れり、復世を離れて、父に往く。二九 其門徒彼に謂ふ、視よ、今爾は明に語りて、一も聲を言はず。三〇 今我等は、爾が知らざる所なく、且人の爾に問ふを待たざるを知る、此に緣りて我等は爾が神より出でたるを信ず。三一 イイスス彼等に答へて曰へり、今信ずるか、三二 視よ、時は至る、今已に至れり、爾等各其所に散じて、我を獨遣さん、然れども我獨に非ず、蓋父我と偕に在るなり。三三 我が此を爾等に語りしは、爾等が我在りて平安を有たん爲なり。世に在りて爾等患難を受けん、然れども勇めよ、我は世に勝てり。

第十七章 一 イイスス此を謂ひ竟りて、其目を天に擧げて曰へり、父よ、時至れり、爾の子を榮せよ、爾の子も爾を榮せん爲なり、二 蓋爾は彼に凡の肉體の上の權を與へたり、彼が凡そ爾の彼に與へし者に永遠の生命を與へん爲なり。三 永遠の生命とは、卽爾、獨一の眞の神、及び爾が遣し、イイススハリストスを知ること是なり。四 我已に爾を

地に榮し、爾が我に與へて行はしむる事を成せり。五 今爾父よ、我をして爾に在りて榮を享けしめよ、卽創世の先に我が爾に在りて有ちたる榮なり。六 爾が世の中より我に與へし人人に、我爾の名を顯せり、彼等は爾に屬し、爾彼等を我に與へたり、彼等爾の言を守れり。七 今彼等は凡そ爾が我に與へし者、皆爾よりするを知れり。八 蓋我は爾が我に與へし言を彼等に與へたり、彼等之を受け、且我が爾より出でしを誠に知り、亦爾が我を遣し、を信ぜり。九 我は彼等の爲に祈る、世の爲に祈らず、乃爾が我に與へし者の爲なり、蓋彼等は爾に屬す。一〇 凡そ我に屬する者は爾に屬し、爾に屬する者は我に屬す。我は彼等の中に榮せられたり。一一 我は是より世に在らず、彼等は世に在り、我爾に往く、聖なる父よ、爾が我に與へし者は、爾の名に因りて之を守りて、彼等を我等の如く一と爲らしめよ。一二 我彼等と偕に世に在りし時、爾の名に因りて彼等を守れり、爾が我に與へし者は、我之を守り、其中一も亡びず、惟沈淪の子は亡びたり、聖書の應ふを致す。一三 今我爾に往く、我世に在りて之を言ふ、彼等が己の内に我の全き喜を有たん爲なり。一四 我爾の言を彼等に與へたり、而して世は彼等を惡めり、蓋彼等は世に屬せず、我の世に屬せざるが如し。一五 我が祈るは、爾が彼等を世より取

らん爲に非ず、乃彼等を惡より護らん爲なり。一六 彼等は世に屬せず、我の世に屬せざるが如し。一七 爾の眞實を以て彼等を聖にせよ、爾の言は眞實なり。一八 爾が我を世に遣し、如く、我も彼等を世に遣せり。一九 我彼等の爲におのれを聖にす、彼等も眞實を以て聖にせられん爲なり。二〇 我惟彼等の爲にのみ祈るに非ず、乃亦彼等の言に縁りて我を信する者の爲なり、二 願はくは皆一と爲らん、父よ、爾が我に在り、我も爾に在るが如く、願はくは彼等も我等に在りて一と爲らん、世が爾の我を遣し、を信せん爲なり、二三 亦爾が我に與へし榮を、我彼等に與へたり、我等の一なるが如く、彼等の一と爲らん爲なり。二三 我は彼等に在り、爾は我に在り、彼等をして一に成全せしめん爲、且世が爾の我を遣し又我を愛する如く、彼等を愛する事を知らん爲なり。二四 父よ、我は爾が我に與へし者の、我が居る所に我と偕に居らんことを望む、彼等が我の榮を見ん爲なり、すなはち爾が我に與へし榮なり、蓋爾は創世の先より我を愛せり。二五 義なる父よ、世は爾を識らず、然れども我は爾を識れり、彼等も爾が我を遣し、を識れり、二六 我爾の名を彼等に示せり、復之を示さん、爾が我を愛する愛は彼等に在り、我も彼等に在らん爲なり。

第十八章 一 イイスス此を言ひて後、其門徒と偕にケドロン河の外に出でたり、彼處に園あり、彼及び彼の門徒は其中に入れり。二 彼を賣るイウダも此の處を識れり、蓋イイスス屢 其門徒と偕に彼處に集りたり。三 故にイウダは兵卒一隊を、及び司祭諸長とファリセイ等より下吏を受けて、炬と燈と兵器とを以て、此の處に來れり。四 イイススは凡そ己に及ばんとすることを知りて、出で、彼等に謂へり、爾等誰を尋ぬるか。五 彼に答へて曰へり、イイススナゾレイなり。イイスス彼等に謂ふ、我は是なり。彼を賣るイウダも彼等と偕に立てり。六 イイススが我は是なりと言ひし時、彼等後へ退きて、地に仆れたり。七 復彼等に問へり、爾等誰を尋ぬるか。彼等曰へり、イイススナゾレイなり。八 イイスス答へて曰へり、我爾等に我は是なりと謂へり、故に若し我を尋ぬるならば此の輩を容して去らしめよ、九 彼が言ひし言に應ふを致す、云く、爾が我に與へし者の中、我一人をも亡さざりきと。一〇 時にシモンペトル劔ありて、之を抜き、司祭長の僕を撃ちて、其右の耳を削げり。僕の名はマルホなり。一一 イイススペトルに謂へり、爾の劔を鞞に鞞めよ、父の我に與へし爵は、我豈之を飲まざらんや。一二 是に於て兵卒と千夫長とイウデヤの下吏とイイススを執へて、之を縛り、二三 先づ之をアンナに曳き至れり、蓋彼

は是の歲司祭長たるカイアフアの岳父なり。一四 カイアフアは、即イウデヤ人に議りて、一人民の爲に死するは益ありと、云ひし人なり。一五 シモンペトル及び他の一人の門徒イイススに從へり、此の門徒は司祭長の識る所の者にして、イイススと偕に司祭長の中庭に入り、一六 ペトルは門の外に立てり。後司祭長の識る所の門徒は出で、門を護る女に言ひて、ペトルを内に入れたり。一七 是に於て門を守る婢ペトルに謂ふ、爾も此の人の門徒の一に非ずや。彼曰く、然らず。一八 時に諸僕及び下吏等寒きに因りて火を焚き、彼に立ちて、煖まり、ペトルも亦彼等と偕に立ちて煖まれり。一九 司祭長はイイススに其門徒及び其教の事を問へり。二〇 イイスス彼に答へて曰へり、我明に世に語れり、我常に會堂及び殿、即イウデヤ人の恒に集まる所に於て、教を宣べて、隱に語りしことなし。二一 何ぞ我に問ふ、聽きし者に我が彼等に何を語りしを問へ、視よ、此の輩は我が言ひし事を知る。二三 彼が此を言ひし時、旁に立てる下吏の一人イイススの頬を批ちて曰へり、爾は司祭長に斯く對ふるか。二三 イイスス彼に答へて曰へり、若し我が言ひし事悪しくば、其惡しき事を證せよ、若し善くば何ぞ我を批つ。二四 アンナは彼を縛りたるまゝ、司祭長カイアフアに送れり。二五 時にシモンペトル立ちて煖まれり。或彼に謂

へり、爾も其門徒の一に非ずや。彼諱みて曰へり、然らず。二六 司祭長の僕の一、ペトルが耳を削ぎたる者の親戚、曰く、我爾が彼と偕に園に在るを見しに非ずや。二七 ペトル復諱みたり、忽鷄鳴けり。二八 彼等イイススを曳きて、カイアフアより公廨に至れり。時已に平旦なり、彼等は公廨に入らざりき、汚されざらん爲、即逾越節筵を食するを得ん爲なり。二九 ピラト出で、彼等に謂へり、爾等に何事を以て此の人を訴ふるか。三〇 答へて曰へり、彼若し惡を行ふ者に非ずば、我等彼を爾に解さざりしならん。三一 ピラト彼等に謂へり、爾等彼を取りて、爾等の律法に循ひて、彼を審判せよ。イウデヤ人之に謂へり、我等には人を死に處する權なし、三二 是れイイススが、如何なる死を以て死なんとするを指して、言ひし言に應ふを致す。三三 其時ピラト復公廨に入り、イイススを召して、彼に謂へり、爾はイウデヤ人の王なるか。三四 イイスス彼に答へて曰へり、爾己に由りて之を謂ふか、抑他の者が我の事を爾に言ひしか。三五 ピラト答へて曰へり、我豈イウデヤ人ならんや、爾の民と司祭諸長とは爾を我に解せり、爾何を爲し、か。三六 イイスス答へて曰へり、我が國は此の世に屬せず、若し我が國此の世に屬せば、我が諸僕は戰ひて、我がイウデヤ人に付さるゝを免れしめしならん、然れども今我が國は此に屬せ

ざるなり。三七。ピラト彼に謂へり、ピラト彼に謂へり、然らば爾は王なるか。イイス答へて曰へり、爾言ふ、我は王なり。我此が爲に生れ、此が爲に世に來れり、即眞實の事を證せん爲なり、凡そ眞實に屬する者は其の聲を聽く。三八。ピラト彼に謂ふ、眞實とは何ぞや。此を言ひて後、復出で、イウデヤ人に謂ふ、我は彼に一も罪あるを見ず。三九。然るに爾等には逾越節に於て我が爾等に一人を釋す例あり、故に我が爾等にイウデヤ人の王を釋さんことを欲するか。四〇。衆人復號びて曰へり、斯の人に非ず、乃ワラウワを。ワラウワは盜賊なり。

第十九章 一其時。ピラトイイスを取りて、鞭てり。二兵卒棘の冕を編みて、其首に冠らせ、紫の袍を彼に衣せて、三日へり、イウデヤ人の王、慶べよ、且其頬を批てり。四。ピラト復外に出で、彼等に謂ふ、視よ、我彼を曳きて、爾等の前に出す、爾等が、我の彼に一も罪あるを見ざることを、知らん爲なり。五。イイス棘の冕を冠り、紫の袍を衣て、外に出でたり。ピラト彼等に謂ふ、視よ、人なり。六。司祭諸長と下吏等と彼を見て號びて曰へり、十字架に釘せよ、十字架に釘せよ。ピラト彼等に謂ふ、爾等彼を取りて、十字架に釘せよ、蓋我彼に罪あるを見ず。七。イウデ

ヤ人答へて曰へり、我等に律法あり、我が律法に据れば、彼は死すべし、蓋己を神の子と爲せり。八。ピラト此の言を聽きて、益懼れたり。九。復公廨に入りて、イイスに謂ふ、爾は奚れよりする。然れどもイイス彼に答を爲さざりき。一〇。ピラト彼に謂ふ、我に言はざるか、爾豈我に爾を十字架に釘する權あり、亦爾を釋す權あるを知らざるか。一一。イイス答へて曰へり、上より爾に與へられしに非ざれば、爾我に對して一も權あるなし、故に我を爾解し、者の罪は更に大なり。一二。是よりピラト彼を釋さんと謀れり。然れどもイウデヤ人號びて曰へり、爾若し此の人を釋さば、ケサリの友に非ず。凡そ己を王と爲す者は、ケサリに叛く者なり。一三。ピラト此の言を聞きて、イイスを外に曳き出だし、審判座に、「リフォストラトン」、エウレイの言にガウワファと名づくる所に坐せり。一四。其日は逾越節の備日にして、時は約六時なり。ピラトイウデヤ人に謂ふ、視よ、爾等の王なり。一五。然れども彼等號びて曰へり、之を去れ、爾等の王なり。一六。然れども彼等號びて曰へり、我等にはケサリの外に王なし。一七。其時。ピラト彼を十字架に釘せんに付せり。彼等イイスを取りて、曳き行けり。一八。彼己の十字架を負ひ、出で、髑髏の處、エウレイの言にゴルゴファと名

づくる所に至れり。一八 彼處に在りて彼を十字架に釘せり、又二人を彼と偕に釘せり、一は右、一は左、イイスス中に在り。一九 ピラト標を書して、十字架の上に置けり、書して云く、イイススナゾレイ、イウデヤ人の王と。二〇 イウデヤ人の多くの者此の標を讀めり、蓋イイススの釘せられし處は城に近かりき、其標エウレイ、グレチャ、ロマの文を以て書されたり。二一 イウデヤ人の司祭諸長はピラトに謂へり、イウデヤ人の王と書す勿れ、乃彼自ら、我はイウデヤ人の王なりと、云へりと書せ。二二 ピラト答へて曰へり、我が書し、ことは書せり。二三 兵卒はイイススを釘せし後、其外衣を取り、之を四分して、各一分を得たり、又裏衣を取れり、裏衣は縫なく、上より渾く織りたる者なり。二四 故に彼等相語りて曰へり、之を裂かずして、之が爲に鬪すべし、誰か之を得るを觀ん、是れ聖書に錄して、共に我が外衣を分ち、我が裏衣を鬪せりと、云ふに應ふを致す、兵卒斯く行へり。二五 イイススの母と、母の姉妹クレヲパの妻マリヤと、マリヤ「マグダリナ」と、其十字架の旁に立てり。二六 イイススは其母及び愛する所の門徒の此に立てるを見て、母に謂ふ、婦よ、視よ、爾の子なり。二七 次ぎて門徒に謂ふ、視よ、爾の母なり。其時より此の門徒彼を己の家に取れり。二八 厥後イイスス一切の事已に成りたるを知り

て、聖書に應ひて曰ふ、我渴く。二九 彼處に醋の満ちたる器の置けるあり、兵卒海絨を醋に漬し、牛膝草に束なて、彼の口に遞れり。三〇 イイスス醋を受けし後曰く、成れり。三一 首を俯して神を付せり。三二 其日は備節日にして、彼の安息日は大なる日なるに因りて、イウデヤ人は安息日に屍を十字架に留めざらん爲、ピラトに、彼等の脛を折りて、屍を取り下ろさんことを請へり。三三 故に兵卒來りて彼と偕に十字架に釘せられし第一の者の脛を折り、第二の者にも亦然せり。三三 イイススに來りて、其已に死したるを見たれば、彼の脛を折らざりき、三四 然れども一人の兵卒、戈を以て、其骨を刺せり、忽血と水と出でたり。三五 見し者は證を作せり、其證は眞なり、彼は言ふ所の眞なるを知る、爾等をして信ぜしめん爲なり。三六 蓋斯くの事の成りしは、聖書の應ふを致す、云く、其骨は折られざらんと。三七 聖書の他篇に又云ふ、彼等は其刺し、者を觀んと。三八 其後アリマフエヤの人イオシフ、イイススの門徒にして、惟イウデヤ人を懼るゝに因りて、自ら隠したる者は、ピラトにイイススの屍を取るを許さんことを請へり、ピラト之を許したれば、彼來りてイイススの屍を取れり。三九 又ニコデイム、曩に夜間イイススに來りし者は、没藥と蘆薈とを合せたる者約百斤を攜へ來れり。四〇 彼等イイススの屍を

取り、布を以て、香料と與に之を裏めり、イウデヤ人の葬の例の如し。四一彼が十字架に釘せられし所に園あり、園の中に未だ曾て人の葬られざる新なる墓あり。四二其日はイウデヤ人の備節日なるに因りて、イイソスを彼處に置きたり。墓の近かりし故なり。

第二十章 一七日の首の日、朝尚味き時、マリヤ「マグダリナ」墓に來りて、石の墓より移されたるを見る。二故に趨りて、シモンペトル及びイイソスの愛せし他の門徒に來りて、彼等に謂ふ、人主を墓より取れり、我等其何處に彼を置きしを知らず。三ペトル及び他の門徒出で、墓に往けり。四二人共に趨りしが、他の門徒はペトルより疾く趨りて、先に墓に來れり。五俯して、布の置けるを見たり、布の置けるを見、七又其首を裏みし中の、布と共に非ず、乃捲きて、別に他の處に置けるを見たり。八其時先に墓に來りし他の門徒も入りて見、而して信ぜり。九蓋彼等は未だ其死より復活すべき事の聖書に載せたるを知らざりき。一〇是に於て二一の門徒復己の所に歸れり。一一マリヤは墓の外に立ちて哭けり。哭く時墓に俯して、一二二の天使が、白衣にしてイイソスの屍の置かれし所に、一は首に一

は足に坐せるを見る。一三彼等之に謂ふ、婦よ、何ぞ哭ける。彼曰く、人我が主を取れり、我其何處に彼を置きしを知らず。一四此を謂ひて、顧みて、イイソスの立てるを見る、然れども其イイソスなるを知らざりき。一五イイソス彼に謂ふ、婦よ、何ぞ哭ける、誰を尋ぬるか。婦は園丁なりと意ひて、之に謂ふ、君よ、若し爾彼を移し、何處に置きしを我に告げよ、我彼を取らん。一六イイソス之に謂ふ、マリヤよ、婦顧みて、彼に謂ふ、「ラウワウニ」、譯すれば夫子なり。一七イイソス之に謂ふ、我に捫る勿れ、蓋我未だ我が父に升らざりき、乃往きて、我が兄弟に告げて曰へ、我は我が父及び爾等の父、我が神及び爾等の神に升ると。一八マリヤ「マグダリナ」往きて、門徒に己が主を見しこと、及び其彼に之を謂ひしことを告げたり。一九是の日、即七日の首の日、既に暮れて、門徒の集れる處の門、イウデヤ人を懼るゝに因りて閉ぢたるに、イイソス來りて、中に立ちて、彼等に謂ふ、爾等に平安。二〇此を言ひて、彼等に己の手足及び脅を示せり。門徒主を見て喜べり。二二イイソス復彼等に謂へり、爾等に平安。父が我を遣し、如く、我も亦爾等を遣す。二三此を言ひて、氣を嘘きて、彼等に謂ふ、聖神を受けよ。二三爾等人に其罪を釋さば、則釋さる、人に其罪を留めば、則留めらる。二四イイソスの來り

し時、十二の一なるフオマ、稱してデイデウムと云ふ者、
彼等と偕に在らざりき。二五 他の門徒彼に謂へり、我等主を
見たり。然れども彼は之に謂へり、我若し其手に釘の迹を見
ず、我が指を釘の迹に入れず、我が手を其脅に入れずば、信
ぜざらん。二六 八日を超えて、門徒復内にあり、フオマも彼等
と偕にせり。門閉ちたるに、イイスス來りて、彼等の中に立
ちて曰へり、爾等に平安。二七 次ぎてフオマに謂ふ、爾の指
を此に伸べて、我が手を見よ、爾の手を伸べて、我が脅に入
れよ、信ぜざる勿れ、乃 信ぜよ。二八 フオマ答へて彼に謂
へり、我が主よ、我が神よ。二九 イイスス彼に謂ふ、爾は我
を見しに緣りて信ぜり、見ずして信ずる者は 福なり。三〇
イイススは其門徒の前に於て、亦他の多くの奇蹟、此の書に
載せざる者を行へり。三一 此を載せたるは、爾等がイイス
スは神の子、ハリストスなりと信じ、且信じて、其名に因り
て生命を得ん爲なり。

第二十一章 一 厥後、イイスス復其門徒にテイワエリアダの
海濱に現れたり。其現れたること左の如し。ニシモンペト
ル、フオマ、稱してデイデウムと云ふ者、ガリレヤのカナ
のナファナイル、ゼワエデイの二子、及び他の二人の門徒共
に在り。三シモンペトル彼等に謂ふ、我往きて 漁せん。

彼等曰ふ、我等も爾と偕に往かん。出で、直に舟に登り
しが、是の夜は獲る所なかりき。四 既に明けて、イイスス岸
に立てり、然るに門徒は其イイススたるを知らざりき。五 イ
イスス彼等に謂ふ、小子よ、爾等に食ふべき物あるか。彼
等答へて曰へり、無し。六 彼は之に謂へり、網を舟の右に施
せ、然らば得ん。彼等施し、之を擧ぐることを能はざり
き、魚の多き故なり。七 時にイイススの愛せし所の門徒ペ
トルに謂ふ、是れ主なり。シモンペトル是れ主なりと聞きて、
裸なりしに因りて、衣を束ねて、海に投ぜり。八 他の門徒
は舟に乗り、魚の盈てる網を曳きて至れり、蓋地を離る、
こと遠からず、約二百尺なり。九 地に上りし時、燃えた
る火、其上に置きたる魚、及び餅あるを見る。一〇 イイスス
彼等に謂ふ、今爾等が獲たる魚數尾を攜へ來れ。一一 シモ
ンペトル往きて、網を地に曳き上げたり、中に大なる魚一
百五十三尾盈てり、斯く多しと 雖、網は裂けざりき。一二
イイスス彼等に謂ふ、來りて食せよ。門徒一も爾は誰た
ると、問ふことを敢てせざりき、其主たるを知らばなり。一
三 イイスス前みて、餅を取りて、彼等に與ふ、魚も亦然り。
一四 イイススが死より復活して後、其門徒に現れしこと、
此れ其三なり。一五 彼等の食せし時、イイススシモンペト
ルに謂ふ、イオナの子シモンよ、爾我を愛すること彼等に過

ぎたるか。彼曰ふ、主よ、然り、爾は我が爾を愛するを知る。イイスス彼に謂ふ、我が羔を牧せよ。一六 又第二次彼に謂ふ、イオナの子シモンよ、爾我を愛するか。ペトル曰ふ、主よ、然り、爾は我が爾を愛するを知る。イイスス彼に謂ふ、我が羊を牧せよ。一七 第三次彼に謂ふ、イオナの子シモンよ、爾我を愛するか。ペトル第三次に、爾我を愛するかと、謂ひしに因りて、憂ひて、彼に謂へり、主よ、爾は知らざる所なし、爾は我が爾を愛するを知る。イイスス彼に謂ふ、我が羊を牧せよ。一八 我誠に誠に爾に語り、爾少き時に於て、自ら帯を束ねて、欲する所に行けり、老ゆるに及びて、爾の手を伸べん、他人爾を束ねて、爾が欲せざる所に曳かん。一九 此を言ひしは、ペトルが若何なる死を以て、神を榮せんとするを示せるなり。言ひ竟りて、又彼に謂ふ、我に従へ。二〇 ペトル顧みて、イイススの愛せし所の門徒の後に従ふを見る、即晚餐の時、イイススの匁に倚りて、主よ、爾を賣る者は誰ぞと、云ひし者なり。二二 ペトル彼を見て、イイススに謂ふ、主よ、斯の人は如何。二ニ イイスス彼に謂ふ、我若し彼が存して、我が来るを持つことを欲せば、爾と何ぞ與らん、爾我に従へ。二三 是に於て此の言は兄弟の間に散じて、此の門徒は死せざらんと言へり。然れどもイイススは彼に、死せざらんと言ひしに非

ず、乃我若し彼が存して、我が来るを待つことを欲せば、爾と何ぞ與らんと、言ひしなり。二四 此等の事を證し、且之を書し、者は、即此の門徒なり、我等は彼の證の眞なるを知る。二五 イイススの行ひし事、他に亦多く有り、若し一一之を書さば、我意ふ、其書は世載するに勝へざらん、「アミン」。